



考古圖彙考

三

481  
1992  
9

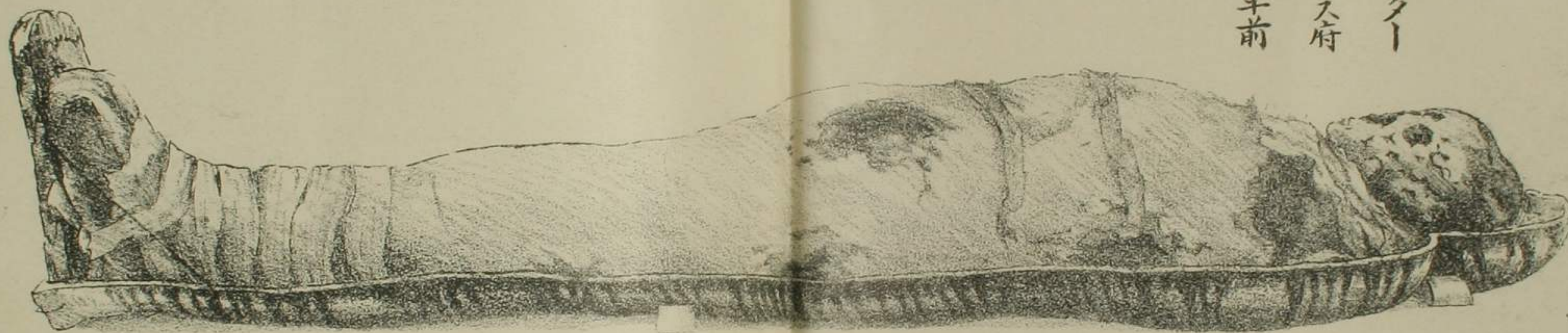




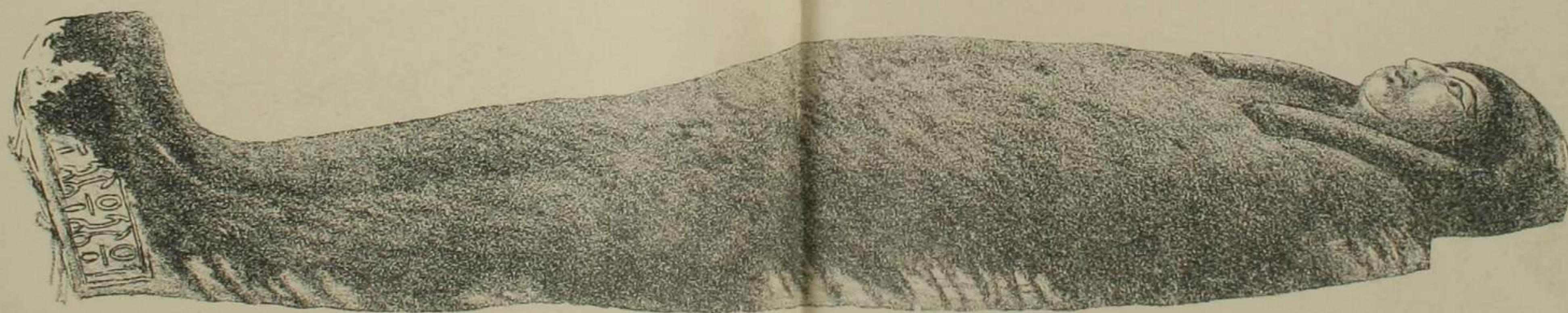
アインクワトの子プシヤレプター  
発見 埃及國テベース府  
年代 凡二千五百年前

# 伊乃木

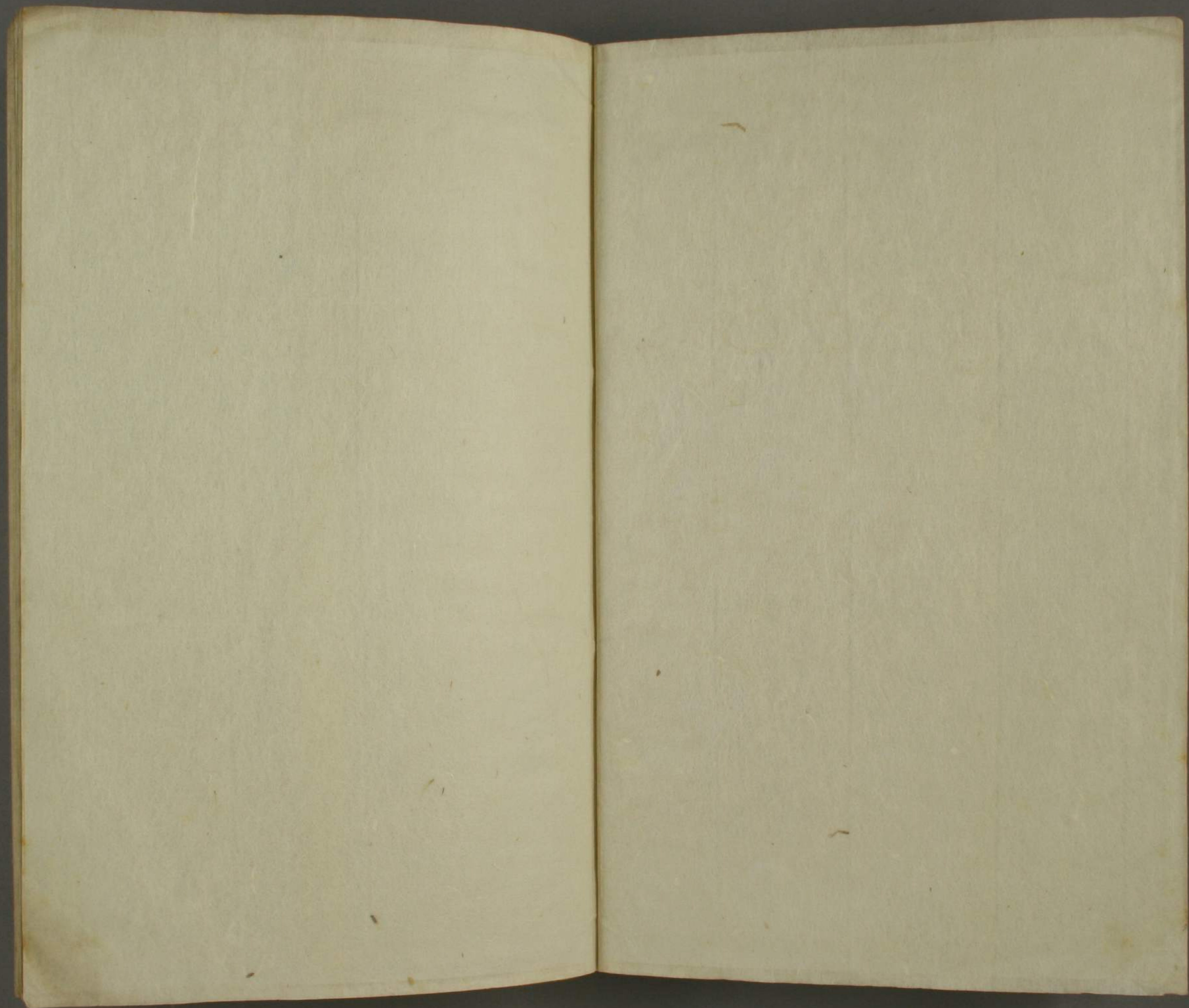
東京帝室博物館御陳列



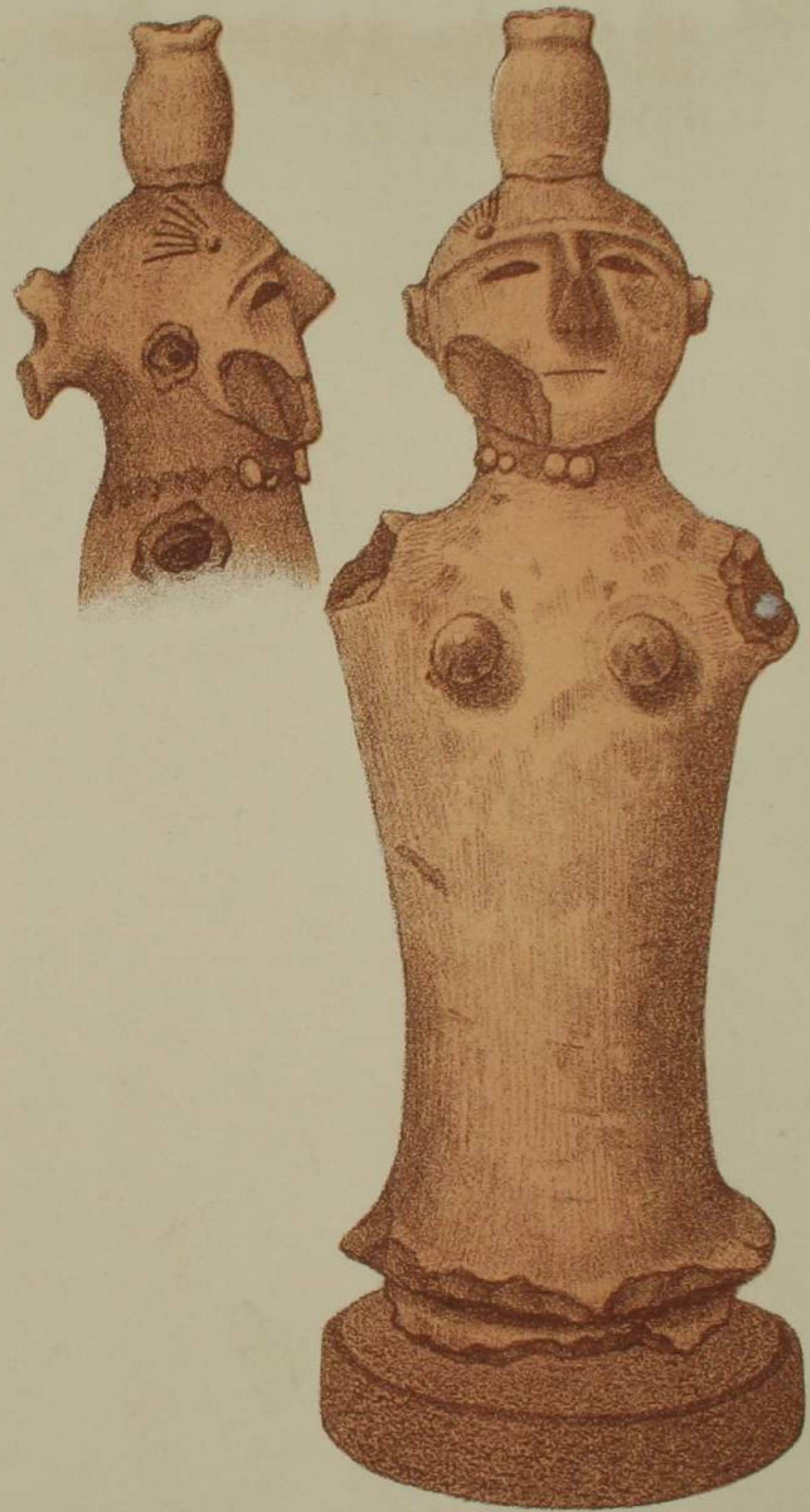
伊乃木



伊乃木の外部



武藏國児玉郡丹生村関口祭見埴輪土偶



"HANIWA" FIGURE FROM SEKIGUCHI, MUSASHI.

を一覽し、形態の特異にして参考上頗る有益なるものなりしかば、遂に人類學教室の所藏と爲すに至りしものにて、其概要は既に去八月發行の本誌第二百三十三號にて報告し置きたり

この土偶の發見地は児玉町の西北に近接せる同郡丹生村大字關口にして、此地は神流川を隔て、上野多野郡に相對し、秩父山麓の餘波は近く西南里餘の地に及べるも、地勢廣闊して神流川の兩岸には古墳の存在すること甚だ多く、關口の如きは實にその群集地とも云ふべき所なりとす。而して此物の大きさを云はゞ、總高一尺六寸、頭上なる瓶の高さ二寸、顔面の長さ三寸七分、肩巾は六寸にして下部即ち裾の所にて徑また六寸あり。後頭なる結髪は上下兩端は欠損し、右頬は發掘の際に鏃を受けしと見へて其一部を欠き、兩手と下方なる圓筒形の部分とを失へる外に、尙ほ多少の欠損なきにあらざれど、其等は爲に舊態を推知し能はざるが如きものにはあらず。

この土偶は結髪の状態と衣服の形狀に依りて女子たることは明にして、頭上に戴ける小さき瓶は、稍々長みを帶

び、其底は土偶内部の空洞に連接するを以て、埴輪全體の上下端に通ぜる空洞を爲し、瓶の大きさ實際當時の婦人が戴けるものは尙ほ大なるものにて、恐らく大形の忌瓶即ち朝鮮土器の類にて、水若くは酒の如き流動物を運搬する状態を摸せしものと思はるれど、製作上の困難より其形を小にして僅かに其形を示すに止めしと思はる。器物を頭上に戴する風は京都の八瀬、大原または伊豆大島などに於て今に婦人の爲しつゝある事なれば、上代に於ても當然此風ありしなるべけれど、從來かゝる形狀の土偶を發見せしことなかりしが、幸に此土偶に依りて面白き證據を得たるものと云ふべく、現に行はるゝものゝ如きは其遺風と思はれ、而して何れも之れが婦人に限れるは偶然の結果なるや否や、尙ほ攻究の餘地あれども、或は斯かる運搬法は婦人にのみ限りしにはあらざりしか。而して瓶を頭上に載するより、重力の中心を保持する爲め少しく反り身となりて、仰向きの姿勢を取る所は此土偶に於て能く示さるなり。結髪は後頭にありて、鬢の形狀は欠損の爲め、其完形を認め難きも、潰し島田に結ひた

るは明かにて、其位置稍、後方に偏するが如くなれども瓶を頭上に置きし爲め、製作上の便宜に依りしと云ふよりは、斯かる位置に結髪を爲す風行はれものと見るべく他の土器などを頭上に戴かざる土偶にても、同様の位置に結髪せるに依りて知るを得、或は其風の起りしは器物を頭上にて運搬すると行はれしに由るものなるやも知るべからず。瓶の右側に當り竹篋の類にて附せしと思はるゝ手掌形のもは、櫛を挿せる状を示せるものに、上代に櫛の存在せしことは古事記伊弉諾尊御祓の條にも見えて、早くより用ゐられしと思はるゝが、現用のものゝ如く巾廣くして齒の數多きものならず、細長き形を爲せしは既に本誌第二百九號に於て大野延太郎氏が云はれし如くにて、從來上代の櫛と思はるゝものは單獨なる埴製にあらざれば滑石製に止まり、葬禮私考附録には櫛を挿せる土偶の圖を載するも、未だ其實物を見さりしが、この土偶に依りて挿櫛の状を知り得たるは、喜ぶべく、その位置の正面にあらざるは瓶を戴ける爲なるべし。耳は圓形の高まりを作りて外耳を示し、金環を附するが如きと

なく、耳孔は竹篋の類にて凹めらる。顔面には兩眼より斜に頬部に掛け、太き一線の朱を塗抹し、以て當時の顔面裝飾を摸し、頭の周圍には瑠璃玉の如き小玉を連ね纏ふ状を示せるが、小玉は多く剝落して殘存するものは數個に過ぎざれども、附着の痕跡に依り其數二十三個なりしを知る。雙手は何れも欠損するが故に其状態を知り難きも、右方の位置は右方の方稍、上がれるもの、或は右手を上げて瓶を支ゆる状を示し居らざりしかと思はるれど、之を確め能はざるは遺憾なり。衣服は襟、帶または紐を附せず、裾部に至りて少しく外方に張れるのみなれど、他の類品に依り、左袴の被布形なるを纏ひしを知り得べし。(柴田常恵)

○一個の臺灣蕃人の頭骨 某所に臺灣北部の蕃人男子の獨幣一類あり右に就き或人語て曰く是れアタイヤル族に屬するメシエヤ社蕃モヘクガイといへる者の頭顱にして蕃界の防隘を守る勇丁の爲めに斃取せられしものに係る實に明治三十三年八月三日の事とすと蓋し此蕃人の頭顱に因みて一の悲劇的なる事實あり元と同社に一女あ

氏ンアイラブ  
り振説演の



早稲田大学の先生

高麗時代の石燈



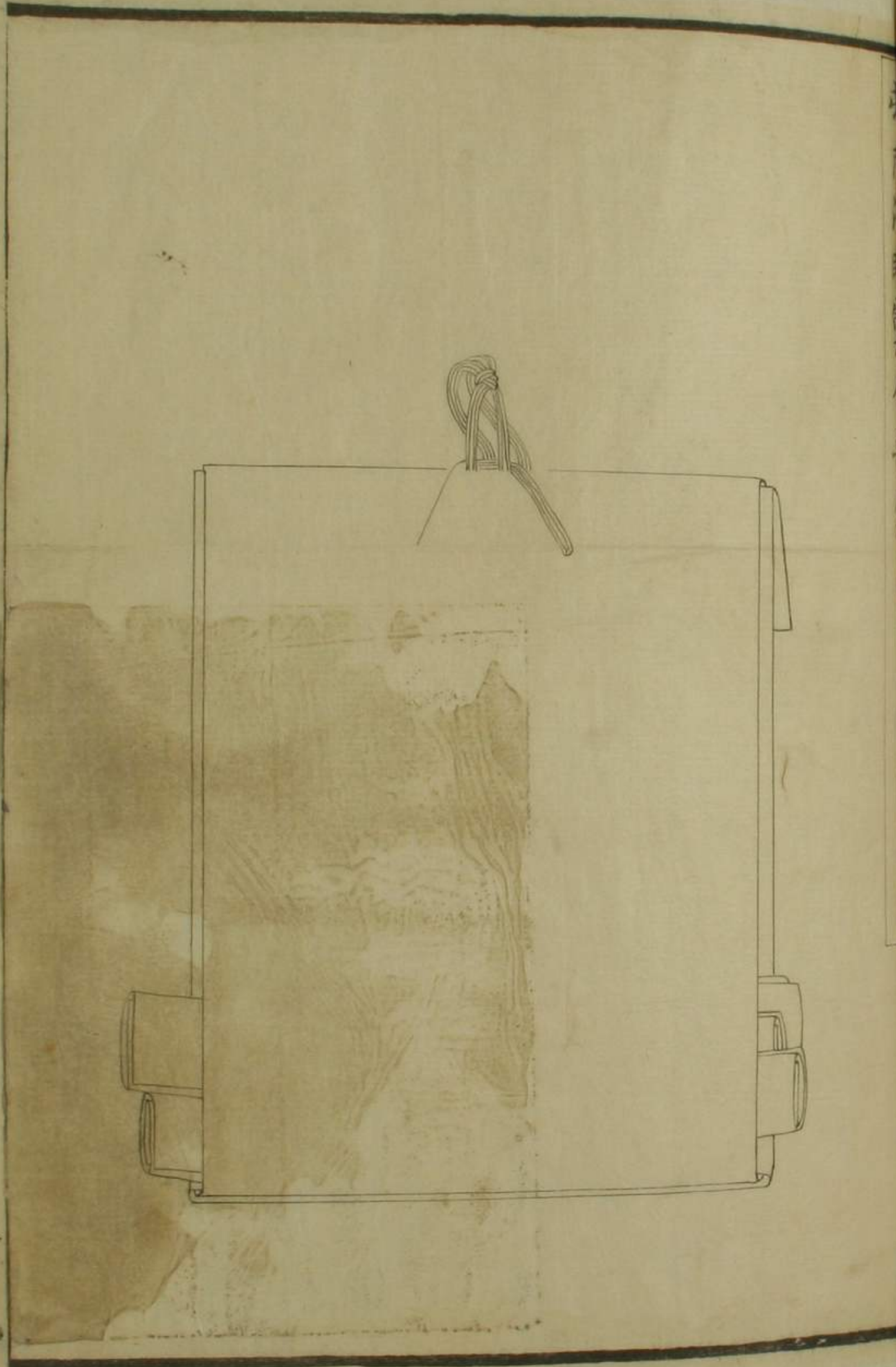
高麗時代の石燈

今より約一千五百年前新羅中興の祖武烈王唐の兵力を借りて三韓を統一し頻りに支那の文化を輸入してより新羅朝の宗教的藝術は漸然として隆盛を極むるに至り雄渾なる唐代の名手巨匠其西に起り秀麗なる奈良朝の美術其東に出で當代の東洋は日清韓を通じて藝術の黄金時代たるの觀ありき左れば朝鮮に於ける此時期の作品にして若し今日に保存せらるるものあらんには定めて世界の驚嘆を博し得たるならんに惜いかな半嶼の天地内は政治の腐敗より革命相重り外は強國の壓迫亂入を受け其結果破壊衰兵燹の厄に逢ひさしも天才の心血を瀉きたる作品も之を本國に見る能はずして却て支那及び日本に保存せられ今日朝鮮の美術としては一且地下に埋没したる陶磁器の發掘物を掘りて殆んど他に見るべきものなからんとするの際十三日を以て上野精養軒庭内に掘り出すの石燈は珍らしくも慶州佛國寺尾盧殿の前に於て千數百年の歴史を閉せ

精妙無類の絶品なり石燈は高さ八尺重二百貫、蓋は稍や軟性の花崗岩に屬し全體彫刻に飾られて殆んど餘蘊なし蓋は永久地に落ちて埋没に歸したりしが昨夏蘇州の際邦人某氏の發見する所となり發掘して之を載せたりと云ふ蓋石は八角にして格致間の彫法頗る興趣に富む基上の蓮蓋は九瓣より或り四角型にして蓋を帶ふ蓋上は圓形の支柱にして深き雲紋の浮彫あり現今の所謂メオ一式に近似し而も其古雅典範比するに物無し其上は火袋を受けたる蓮座にして十瓣より成り各個の瓣の中央に指輪大の紋様あり此蓮蓋は奈良美術の精華として仰がるも藥師寺東院聖觀音基座中のものと一致するを見る蓋座の上は火袋の縁を作せる處に又精細なる彫刻の痕跡あれども殆んど磨滅して分明ならず火袋は楕圓形の太鼓狀にて孔を穿たず四方に或は立ち或は座したる佛像を彫り鼻目劍落したれども秀逸たるを失はず佛像の天上部に於ける輪廓の曲線は印度希臘式の風致を現はせり蓋は前記の如く久しく地中に在りたるを以て色少しく變じたる如く真るも純然

たる新羅式にして極めて輕快の感を抱かしむ其周邊は十二角となり下面に蓮瓣の平面彫刻あり蓋上、紐を以て鉢巻の狀をなせる蓋盤あり要するに意匠の豊富にして變化ある全體の姿勢能く整頓して古色蒼然人に迫る所眞に珍重すべしとなり





東市水部司水原長家仁和寺宮候人某藏

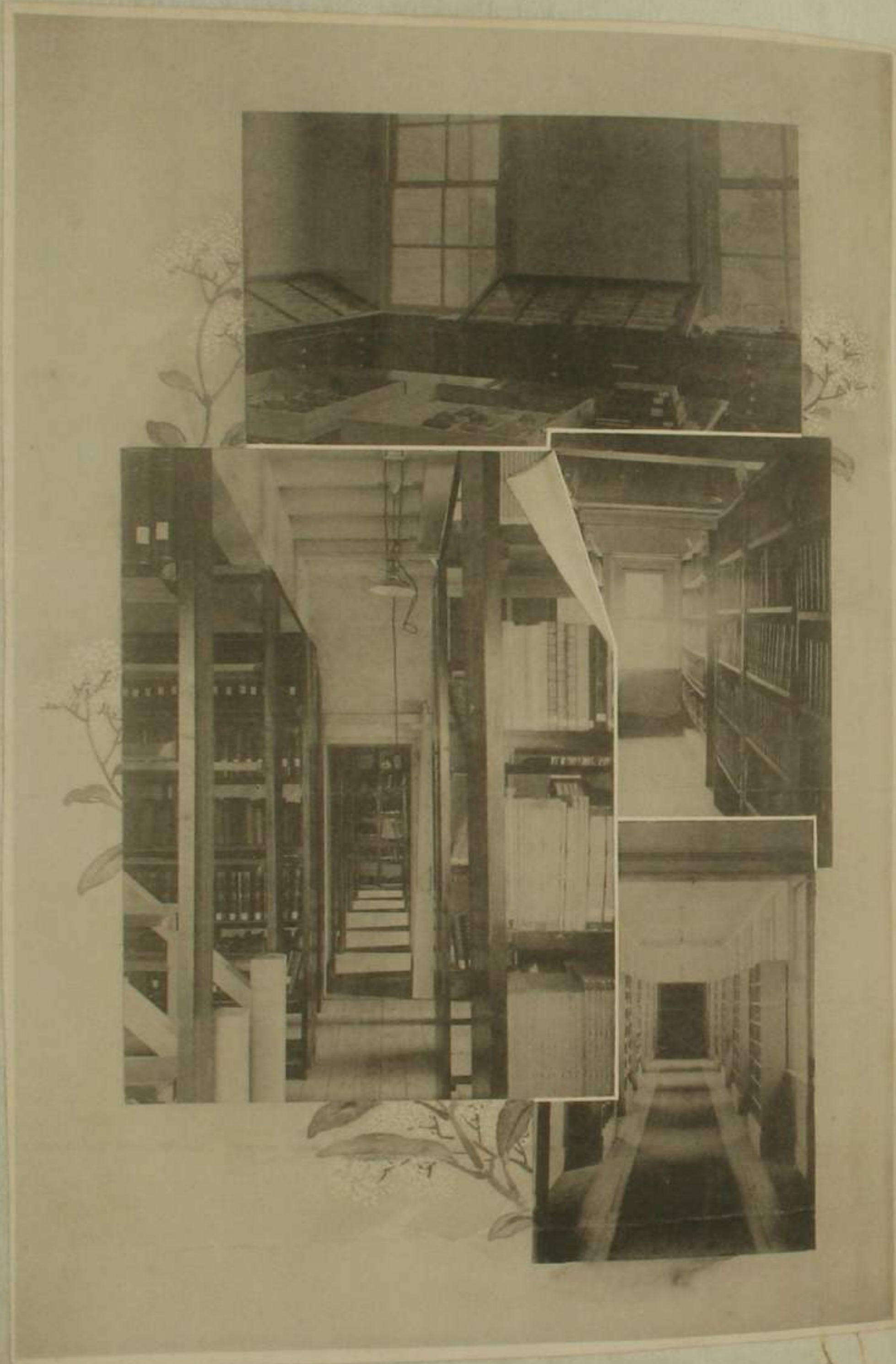
百萬塔  
家花

名目抄  
胡瓶  
江家次芽  
元日草舎屋扁









たもかけ (三五)

市島徳次郎氏

○酒、温雅、沈着にして一寸昔しの漢法醫とでも云ひたきやうの風采、しおし、普通の竹庵老に多く見る如きイヤミは銅はどもなく、品格の高き所は男爵以上、子爵の位値は誰かなりといふ者あり、但だこれほどの人で壯士老居が無二の好物といふも一奇。

○左まで替古を積みたりと聞かぬに、書を善くしに巧みなるは、天性の器用なるを見るべく、市家お出入の人の家に「開山」等々の書あり、

る扁額又は軸物を折々見受るは、昔な君が閑餘の業なりと云ふ、加ふるに寫真もやり、刺繍もやるなど、中々に多藝多能。

○市島家は元と丹波市村の豪族、溝口氏新發田移封の時隨從して始めて越後に來りたるもの、君は同家越後來住後第七代目の主人なる由、歳五十七。(並に載すは君の手跡)

徳次郎





埋忠重義作名所模鏝  
岡田彦左衛門宣次作桐模鏝

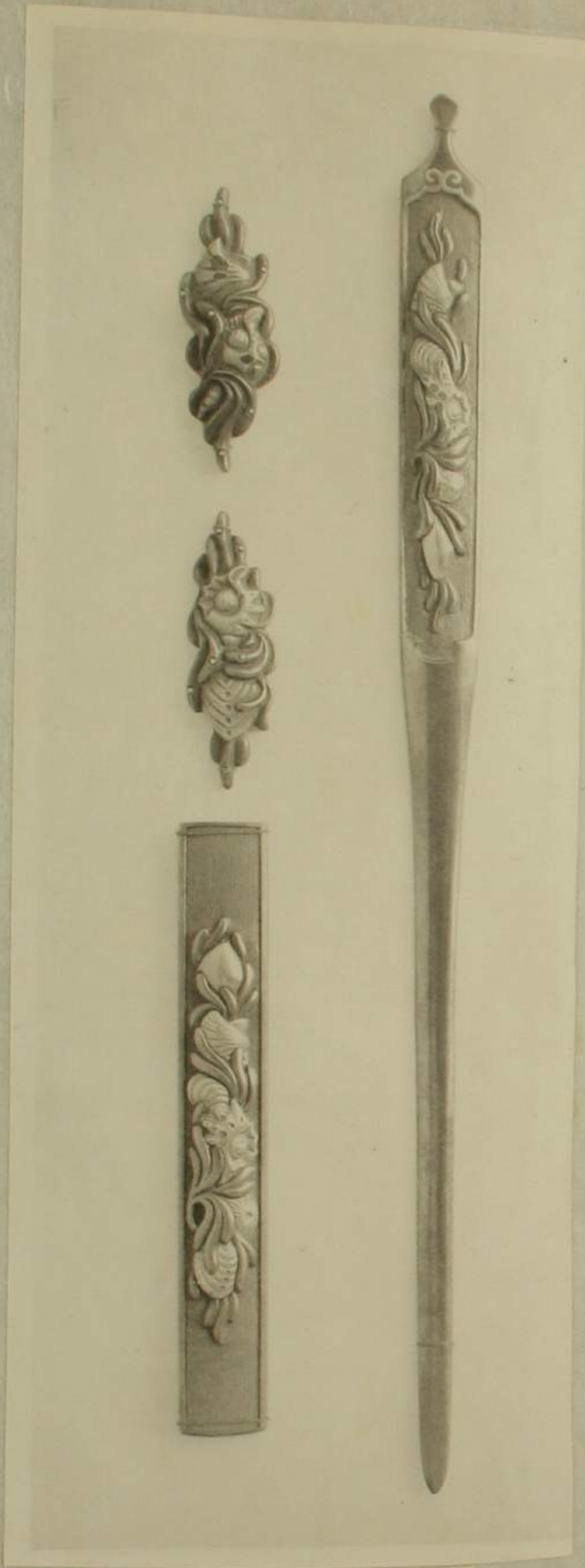
● 刀劔の装具

東京帝室博物館藏

〔名所模様透彫鏝〕 鐵地に金銀を被せ、高彫毛彫及象箴を施す。作者は埋忠重義なり。〔弓箭模様透彫鏝〕 全部鐵質、傳へて明珍信家の作と云ふ。〔桐模様透彫鏝〕 鐵地に金を被せ、周縁に組舛を象箴す。銘に岡田彦左衛門宣次とあり。〔破扇模様透彫鏝〕 鐵質にして周縁に草葉を象箴す。作者は西垣勘平なり。〔貝盡浮彫三所物〕 烏銅魚子地に模様を浮かし、金を以て色取る。笄は後藤宗乗の作、小柄及目貫は後藤榮乗の作なり。

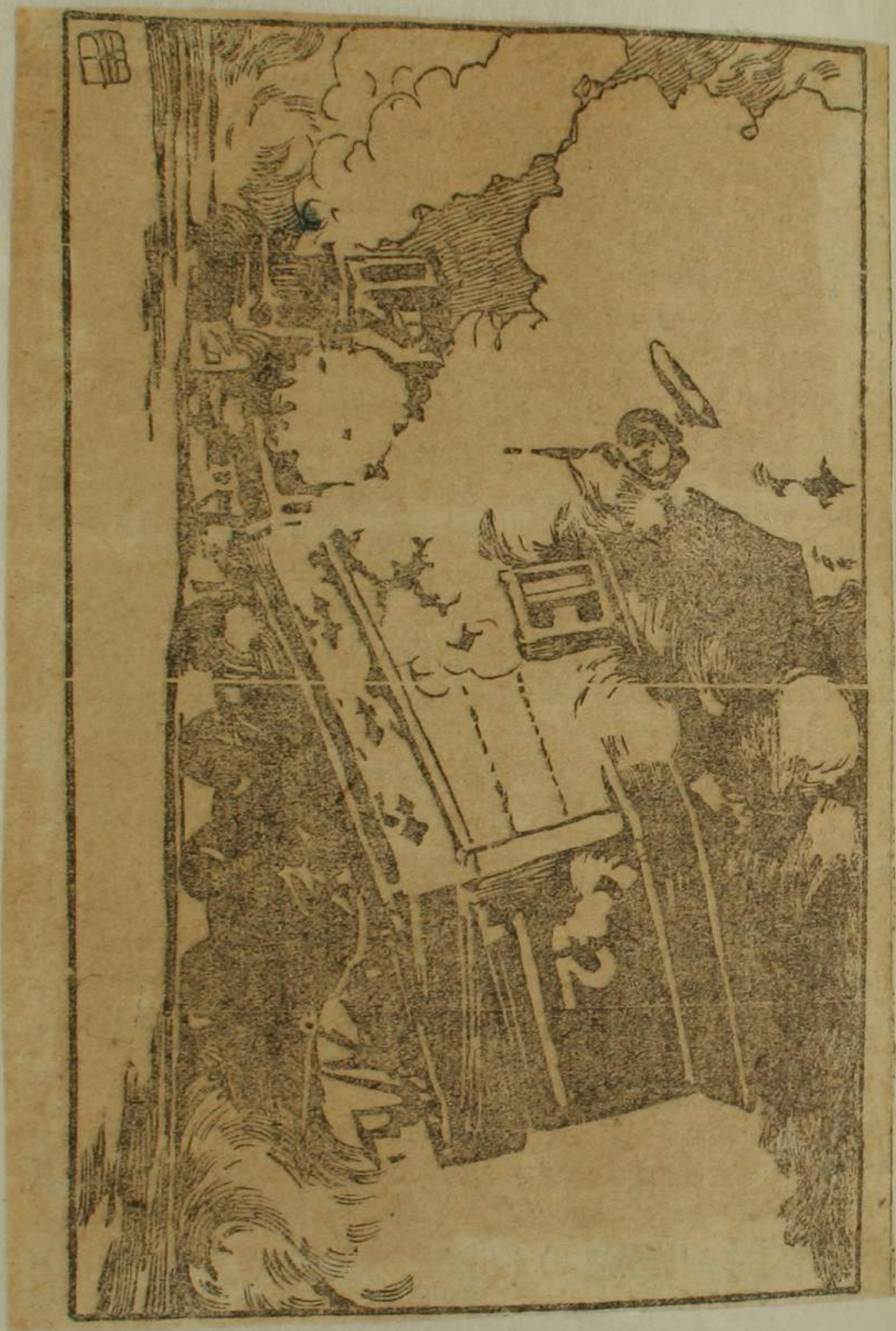


傳明珍信作家弓箭模樣鈔  
西垣勘平作破扇模樣鈔



物所三樣模畫貝  
作乘榮藤後貫目柄小  
作乘宗藤後筭





機關車を衝突せしむ

米國にては折々機關車を衝突せしめて之を見世物となすものとあるが本年の獨立祭即ち去る七月四日にもブルックリンに於て此の大活劇を演ぜしめたるよし其所は同地ブライトン海岸の競走庭にして豫め一團足らずの鐵軌を敷設しニユージャー

シーのセントラル鐵道會社より大なる機關車二臺を輸入し之を相衝突せしむるの仕組なりしが正午十二時頃となるや之を見物せんとして集り來るもの踵を接し須臾にして其數四萬と註せられ同庭の開始以來未だ嘗て斯くの如き群集を見れるものなしといふ左の程に第一號機關車はロイ マンユース、第二號機關車はマエーヅワイアーなる機關手各之を支持し衝突に先ち具さに試運轉を行ひて其の故障なきを確めたる上、鐵軌の兩端に停止して今や信號あるを待受ける間もなく午後

五時五十分相觸の汽笛三聲は第一號機關車より發せられ第二號之に答へて蒸氣を吐く音勇ましく互に徐行を初めたるが進むに約五十分、第二號機關車は既に調直しきを得て愈々回轉急ならんとするにぞ斯くと見たる機關手は忽ち身を跳らして水中に投じ第一號の機關手も亦リイダアを引直して機關車を去れり後には機關車手縛放されし馬の如く風を切つて走るものと益々速に、而して豫め鐵軌の上を上られたる水雷は車輪に觸らる毎に爆發して雷の如き音をなし一層壯快の感を與へけるが兩機關車は一ヤードより一フット、一フットより一インチと次第に相近づき來り觀客の心臓は其悸動早鐘の如く而して第二號車が線路の中央點を今や通過したりと見る此時早く既に兩車は轟然たる響を發して衝突し忽ちにして兩箇の機關車は混亂なる葉片の一丘となり終りて僅に残れるは後に控へたる炭



常陸國行方郡立花村大字沖洲發見猿形埴輪  
中澤澄男氏藏

Clay Figure of Monkey, from Okisu, Namekata-gōri, Hitachi.

○猿形埴輪

柴田常惠

卷頭に挿入せる猿形埴輪は常陸國行方郡立花村大字沖洲にて昨三十八年六月頃發見する所に關はり、會員中澤澄男氏の所藏に屬するものなり、此發見地の近傍は古墳の存在する事少からず、土偶の發見されしこともありたれども、猿形埴輪の發見せられたるは當に此地方に於てのみならず、從來各地の古墳より種々の埴輪は發見されど、猿形のものに至りては他に類品のあるを聞かざる所なり。

その大きさは最長にて九寸、頭部の高さ四寸、顔面の長さ二寸五分、その巾また最廣部にて畧ぼ之に同じく、胴徑約四寸あり。顔面には一眸に朱を塗り、前額にも縦に一朱線を施し、兩耳は共に缺損すれども、其側に朱を塗らるる痕跡を止めり、其全軀の姿勢は跪きて頭を右に向けたるものなりと思はるれど、前肢は胸部に其附着せし痕跡を止むるのみにて全く缺損し、腰部以下を失ひ、背

部には何物か附着せしが如く缺損の痕を存せり。

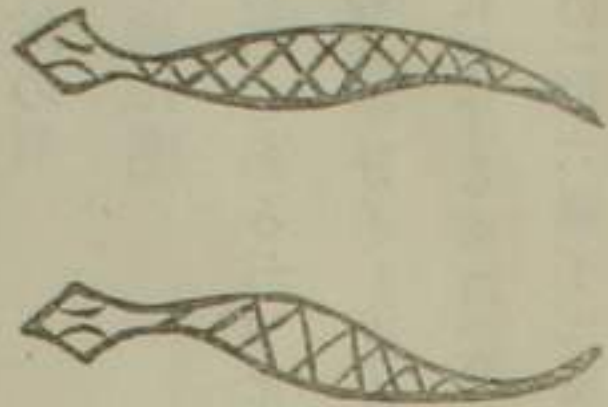
猿の事は神代卷に猿田彦、猿女君の名見え、猿田彦の顔の赤かりしことを記るし、この埴輪には顔面に朱を塗る所など上代の日本人が猿に對する觀念の一斑を示すものかと思はれ、また萬葉集には「痛醜賢良乎爲跡酒不飲、人乎熟見者猿二鴨似」とあり、和名抄には「猿善負子乘危而投至、倒而還者也、字亦作猿、和名佐流と記する所などより推察すれば、上代に於て既に猿を飼養したるもの如く、善負子乘危とある所より見れば、此埴輪の背部に存せる何物か附着せし痕跡も兒猿を負へるものにはあらざりしかと考えらるれど、固より斷すべき限にはあらざるなり。

この猿形埴輪に因んで一言すべきことは、他動物の埴輪のことなり。彼の垂仁紀に見ゆる埴輪の起原に關する記事は、後世に於て土師の一族が自己の歴史を尊くせんとして、爲にする所ありて構成したるが如き觀ありて、記事其物に就ては餘り多くの信用を措く能はざれども、人、馬及び種々の物形を造りしことあるに考ふれば、少くと

も我が上代に於て埴輪として造られたる物には人、馬の外に種々のものありしや明かなり。之を發掘に依りて證するに他に輶あり盾あり、瓶の如きあり家屋の如きあり、笠の如く見ゆるものあるなど、將來研究の進むに従つて尙ほ疑問に屬するものも明瞭と爲るべく、異種の發見もあるに至るべし。而して今日に於て知られたる動物の埴輪に至りては獸類に於てはこの猿の外に馬、牛、兎、猪あり、鳥類としては鷄及び水鳥あり。埴輪にはあらねど山城木幡山より出てたる齋瓶には鹿の附着するあり、上野勢多郡大室より出てたる齋瓶にも所謂青龍白虎など四神の附着するあり。參考にもとて此に埴輪の動物を圖寫して掲ぐることせり。

其の俗に  
を出入所  
其の俗に  
其の俗に  
其の俗に  
其の俗に  
其の俗に  
其の俗に  
其の俗に  
其の俗に  
其の俗に  
其の俗に

第一図  $\frac{1}{20}$

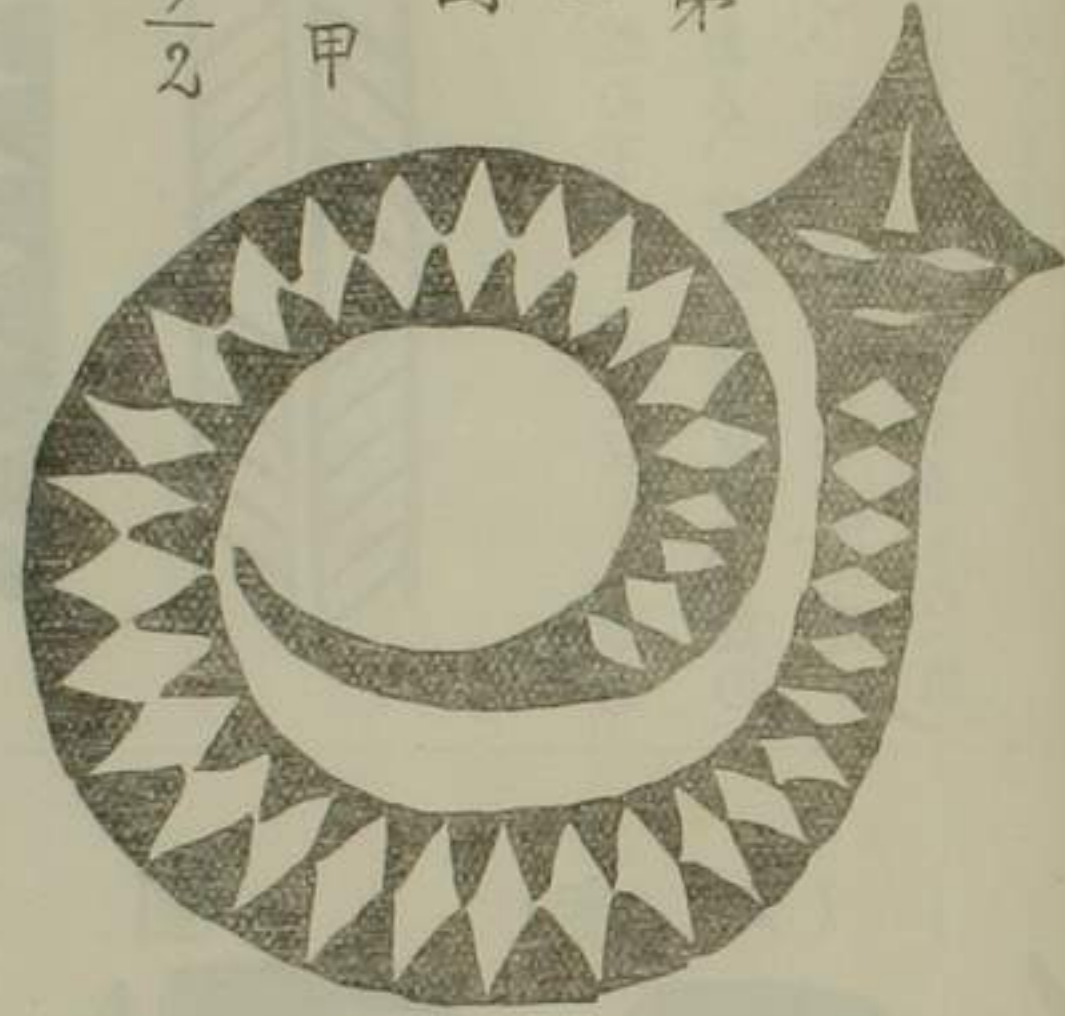


第三図 実大



第二図

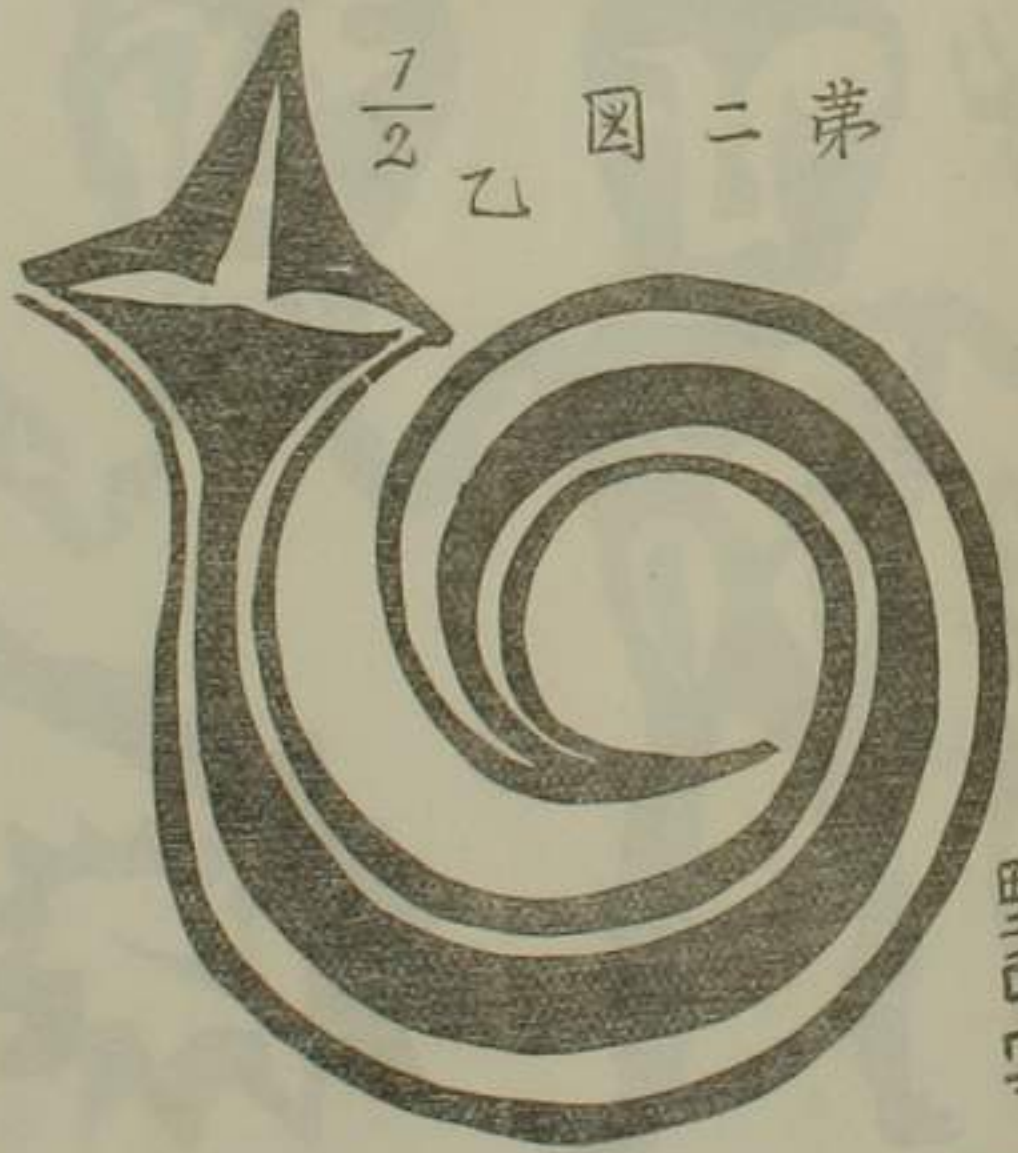
甲  $\frac{1}{2}$



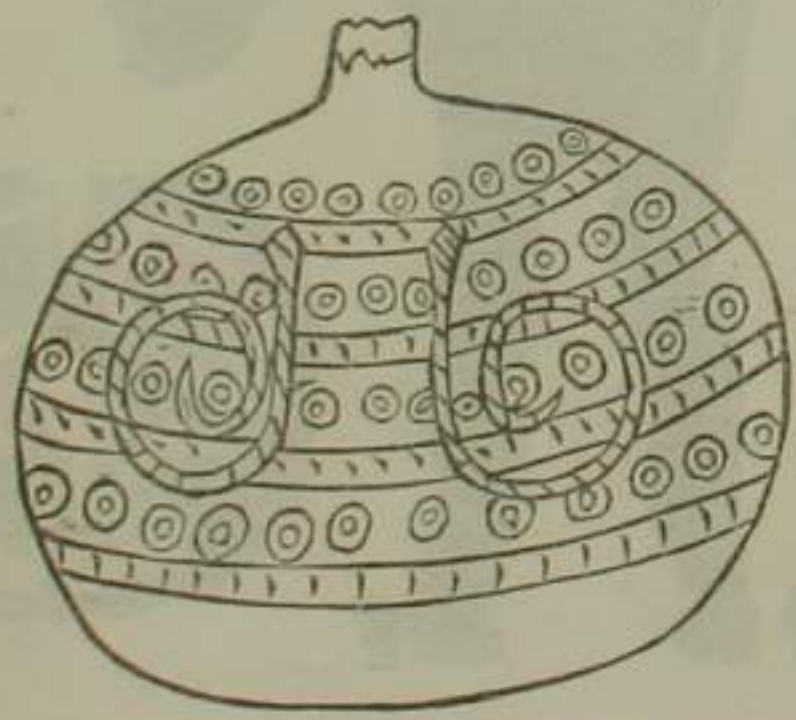
第四図  $\frac{1}{2}$



第二図 乙  $\frac{1}{2}$



第五図  $\frac{1}{5}$



野田写

臺灣土蕃の蛇につきての敬虔的觀念及び之に伴生する模様之應用(伊能)



山城國宇治橋碑圖

即因微善爰發大願	卅有釋子名曰道登	浼浼橫流其疾如箭
結	世	終

上野國綠野郡山名村山上石室傍碑

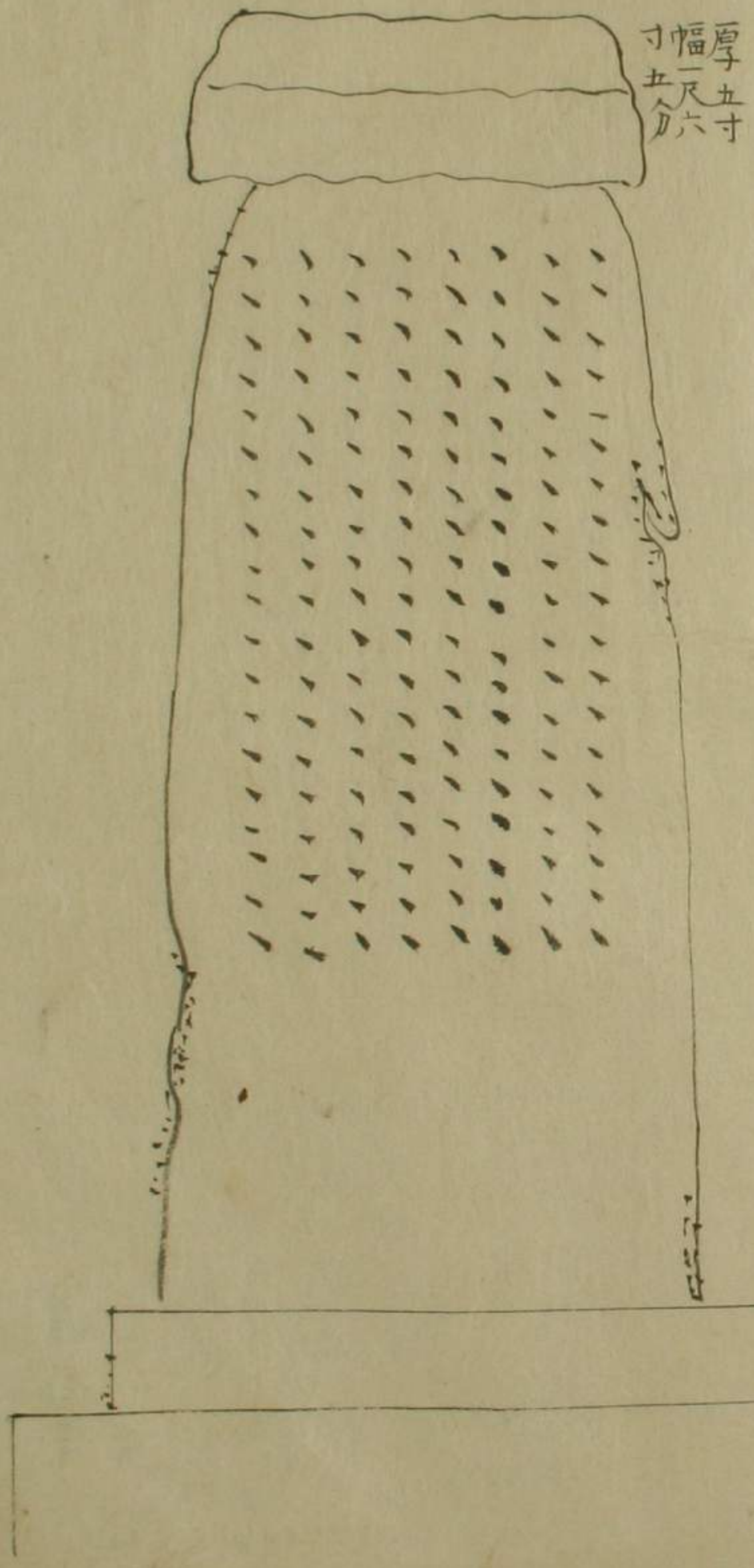
高三尺餘  
徑一尺二寸許

辛巳歲集成三日記

伏野三家定場保守命孫黑賣刀自此  
新川臣兒斯豆弥豆大孫大兒臣娶三兒  
長利僧母為記定文也

放光寺僧





下野國那須郡國造碑圖 高四尺

厚五寸  
幅一尺六寸

高七寸

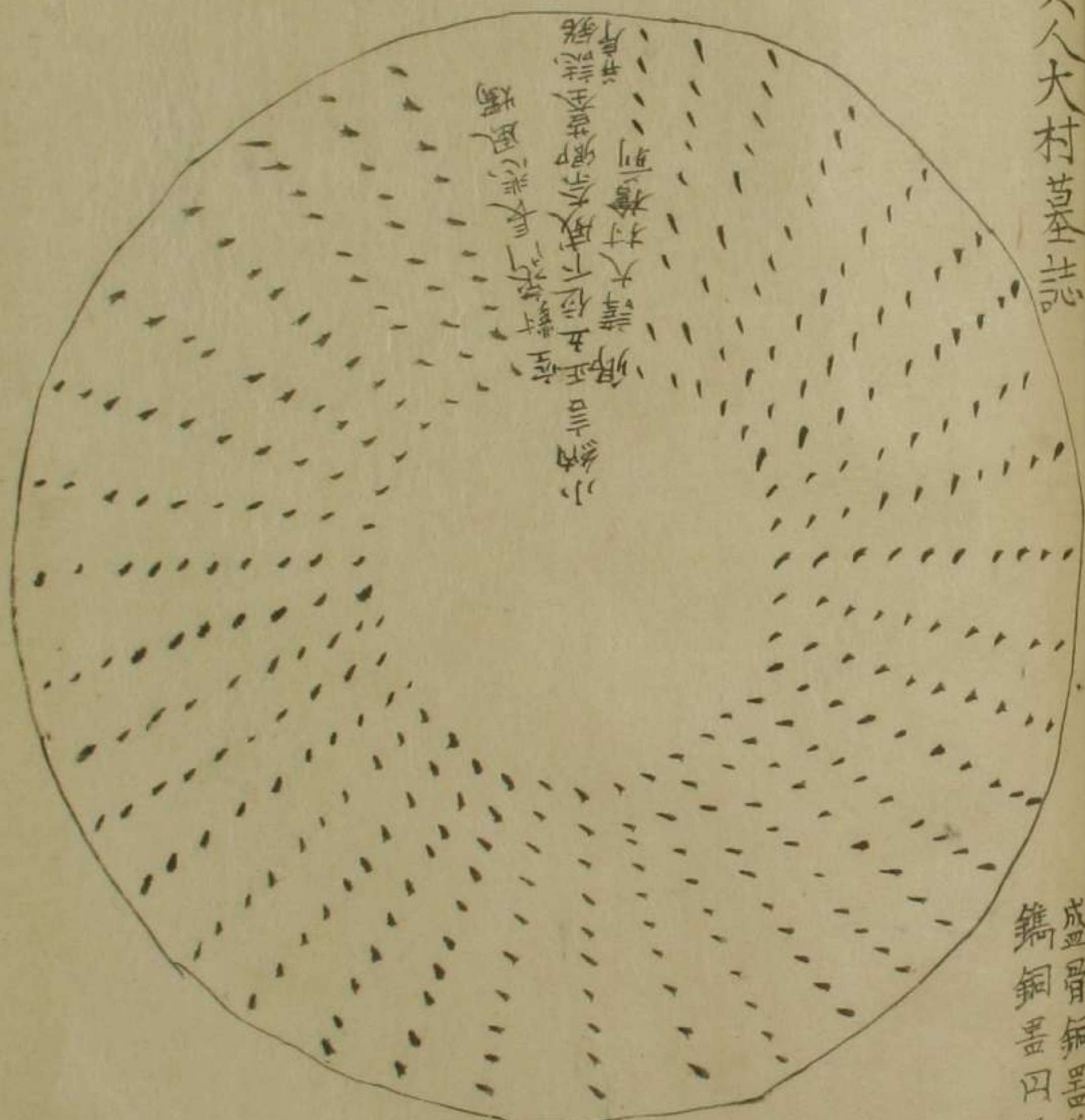
高三寸  
高一尺寸

○今

○那須國造碑

今ヨリ八四五五年ノ先上列湯津上村ト云アリ里民地ヲ掘テ一方石ヲ得テ  
 寫シ本帝ニシレハ高サ二尺ニ寸テ幅九寸アリ碑文凡八行アリ一行ニナ  
 字アリ原不子呂九年己丑四月飛鳥淨御原大宮那須國造追大壺  
 那須宜支提許督被賜歲次庚子歲正月二十日辰第弥故意  
 斯麻呂立碑云凡文字二百七十一字アリ文辭百拙不分明ヨリ最初ノ  
 二字明ラズ朱鳥ト云人アリ又ハ永日ト云人モアリ右ハ那須ハ一國ニシテ  
 ノノ司ヲ國造ト云造ハミヤウコトヨミテ上世一國ノ司ニテ民神ノノヲ司ル古ハ百  
 四十國ニワリテ國別ニ國造アリ舊事記ニ詳ナリ追大古ノ位階ノ名  
 古時ノ制地中ヨリ出ル玆全交別冊ニ書置ク水戸ノ儒官考モアリ  
 サテ飛鳥淨見原天皇ト申ハ天武帝ノト也持統天武ノ后也相繼テ  
 コ大宮ニ在シヨリテ又飛鳥淨見原ノ大宮ト稱スルナリシカレハコノ己丑  
 持統ノ朱鳥三年也シカルニ元年トアリ唐ノ則天后ノ永昌元年ニ當田  
 文字ハ永日ト云ル大カタ近キ由イヘリ然レ唐ノ年号ヲ用ルイフカニ  
 コトニ元年四月ハアハ唐ヨリ日本ノ通路京ヨリ野別テテノ路次數千  
 里カニテエワカニ達シカタキ十九ハ

成奈真人大村墓誌



成奈真人大村墓誌  
鑄銅蓋四徑八寸

上野國多胡郡羊大夫碑圖  
高四尺五寸  
橫徑一尺九寸

并官符上野國片岡郡綠野郡甘  
良郡并三郡內三百戶郡成給羊  
成多胡郡和銅四年三月九日甲寅  
宣左中并正五位下多治比真人  
大政官二品穗積親王左大臣正二  
位石上尊右大臣正二位藤原尊

○野州多胡碑

上野國多胡郡本郷村ト云所ニ古キ碑石アリ古来穂積親王  
墓碑ト云傳フソノ上ニ古キ樟樹アリテソノ上ニ生カリテ碑身半ハ  
樹ニカカルト云リ近比ソノ碑ハ委細ヲ尋ルハ其碑高四尺四寸ヨコ二尺  
厚サ二尺八寸五分ソノ下ニ墓アリ上ニ覆石アリ中ソリテ平瓦ノ如シ三尺  
四寸ヲテ厚サ六寸アリ石面ニ記ス

弁官符上野國片岡郡緑野郡其良郡并三郡  
内三百所郡成給<sup>○</sup>成多胡郡和銅四年三月九日  
甲寅宣左中弁正五位下多治比真人大政官二  
品穂積親王左大臣正二位石上<sup>□</sup>右大臣正二  
位藤原<sup>□</sup>入皇四十二代<sup>原存</sup>

因テ續日本紀ヲ考ルニ元明天皇和銅四年三月

割上野

国其良郡織裳韓級矢田緑郡武美片岡郡山等六郷  
別置多胡郡ト碑ハ蓋シ此時建元<sup>一</sup>ソノ文符符<sup>ヲ</sup>合セタルカ  
如シ太政官符<sup>ヲ</sup>石ニ刻テ後世<sup>ニ</sup>ユスナリ又按ルニ慶雲三年二品  
穂積親王知太政官事<sup>和銅元年</sup>石上麻呂任左大臣藤原  
不比等任右大臣碑文位署連名又ニ文ト符合碑文石上藤原  
ハ字ノ下文字不分明上ノ例ヲ考ルハ各朝臣ノ二字アルヘキカ

上野國綠野郡根古屋村碑 高二尺三四寸  
徑一尺五寸餘

上野國羣馬郡下贊鄉高田里  
三家子孫為七世父母現在父母  
現在侍家刀自餌三君目頃刀自大兒居  
那刀自孫物部千足次馳刀自次與典  
刀自合六口又知識所結人三家老人  
次知刀呂鍛師儀ア君日郊之麻呂合三口  
如是知識結而天地誓願仕奉

石文  
神龜三年丙寅二月廿九日

南都藥師寺佛足石并碑圖

般若高一尺五分  
 平面縱二尺五寸  
 橫三尺二寸五分

碑高六尺餘廣一尺五寸餘厚二寸五分許  
 和歌二十一首分為二段上段十一行下段十行上段  
 第一首上有恭佛跡三字第二首上有十七首四字  
 下段第七首上有呵噴生三字第九首上有死字蓋  
 十七首讚佛跡歌也四首詠呵噴生死歌也



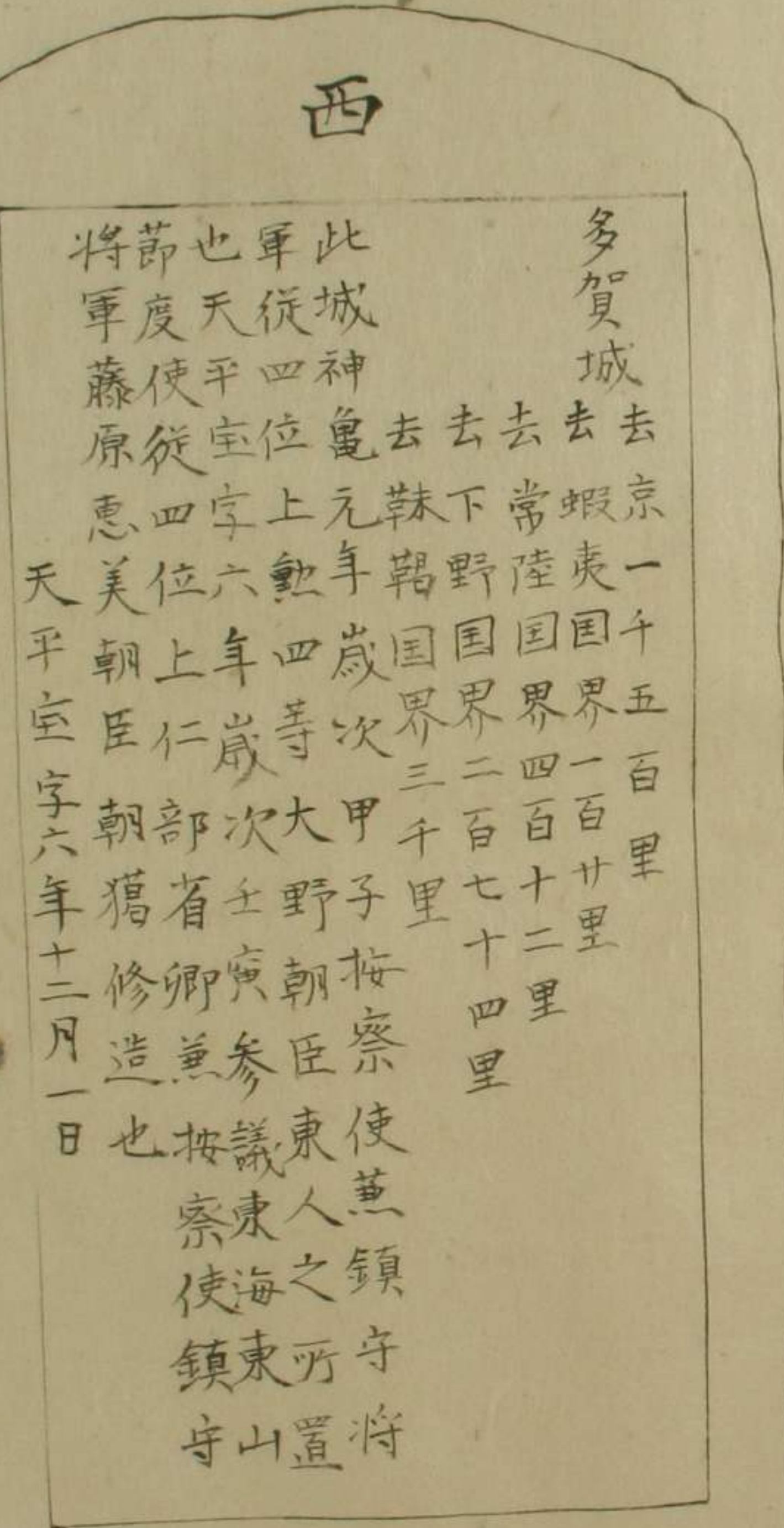
跌石正面  
 有拾界  
 長一尺五寸  
 廣一尺九寸  
 餘其中二十  
 行  
 右面十七行

恭佛跡

十七首

呵噴生  
 死

陸奧國宮城郡多賀碑圖  
 高六尺五分 周圍九尺六寸  
 八分石體三稜



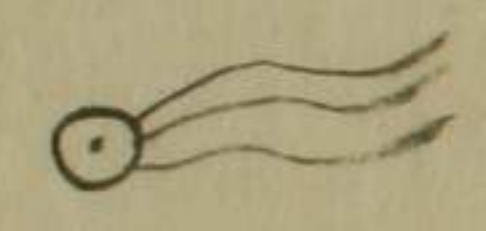
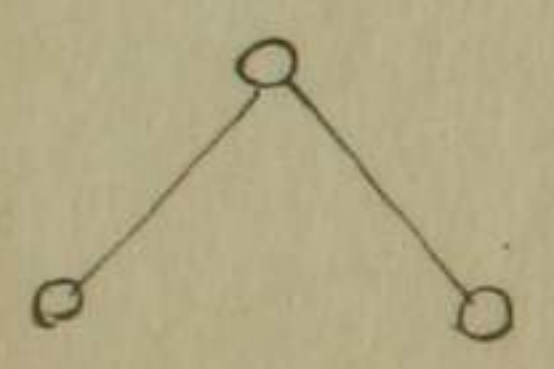
郭内施字地縱長四尺五分橫闊二尺六寸四分首趾各一尺

陸奧國壯麻郡石港蛇田村碑 高三尺 上橫六寸五分 下橫一尺

田道凸嶺

追遠辨洛感念詔既碑一幹於伊寺水門旦亥於鎮出亦之

文陰碑





武州本所牛島村牛御前  
 裏表

高三尺五寸  
 徑一尺七寸  
 郭內徑一尺  
 三寸五分



奉造立釈迦像 一軀

貞觀十七乙未天

三月日

法花千部

明王院

奧州宮城郡燕澤村碑圖  
 高六尺有餘  
 徑三尺

圓相徑一尺三寸



夫呂ノ直宜分對	ノ豆益斗妙以又	此州由砥吊止龜	元并多尻午後殞矣	弘安第五元 <small>玄野仲秋二十日彼岸修里末清俊謹撰</small>
---------	---------	---------	----------	---------------------------------------

郭長二尺八寸橫一尺二寸

大和國吉野郡古市村砦圖

檢非違使別當參議文屋秋津公

興  
秋津城主文屋姓秋津帶刀守清卿

下野國河内郡宇都宮誓願寺鐵碑

高六尺許碑頭有種子及三尊像  
文字欵識橫一尺餘

八葉白蓮一肘間

夫母者四恩之先也孝者百行之源也回茲當三十

炳現阿字素光輝

三回之忌日命宇津宮之治鑄彌陀之種子三尊之

禪智俱入金剛縛

像奉祈先妣之菩提則諸佛之照覽早於六超之

招入如來寂靜智

苦滅連生九品之淨其乃正法界平等利益敬白

正和元年八月日孝子公綱

下野國河内郡宇都宮誓願寺鐵碑文

八葉白蓮一肘間

炳現阿字素光輝

大日經禪作色

禪智俱入金剛縛

招入如來寂靜智

夫母者四恩之先也孝者百行之源也目茲當三十

三回之忌日命宇都宮之治鑄彌陀之種子三尊之

像奉祈先妣之菩提則作諸佛之照覽早於六超之

苦滅連生九品之淨其乃正法界平等利益敬白

正和元年八月日孝子

子字之誤考并  
碑面作字

此碑以鐵鑄碑頭有弥陀種字及三尊像在宇都  
宮誓願寺街誓願寺院內不錄孝子名故不知何  
人所建相傳宇都宮公綱為其母作之按正和元  
年先元弘之役十九年當公綱之時則所傳稱或  
然焉或云孝子下有公綱二字漫滅不得搨焉

武藏國八王子在方碑高三尺三寸上缺

橫一尺四寸  
郭内橫一尺二寸八分

武藏國八王子在方碑高三尺三寸上缺  
 橫一尺四寸  
 郭内橫一尺二寸八分  
 武藏國八王子在方碑高三尺三寸上缺  
 橫一尺四寸  
 郭内橫一尺二寸八分

武藏國八王子在方碑高三尺三寸上缺  
 橫一尺四寸  
 郭内橫一尺二寸八分

武藏國八王子在方碑高三尺三寸上缺  
 橫一尺四寸  
 郭内橫一尺二寸八分

飽間齊藤三郎勝原盛負生年廿六於武州符中五月十五日打死  
 同孫七家行廿三同死  
 飽間孫三郎宗長世五於相州村岡十八日討死  
 按太平記元弘三年癸酉五月十五日新田太郎源義貞與鎌倉戰于分陪十六日陷分陪營十八日燒村岡藤沢元瀨腰越而攻鎌倉大敗之

武藏國八王子在方碑高三尺三寸上缺

橫一尺四寸  
郭內橫一尺二寸八分

武藏國八王子碑  
 武州野口村  
 勸進玖阿弥陀仏  
 元弘三年癸酉五月十五日敬白

武藏國八王子碑  
 武州野口村  
 勸進玖阿弥陀仏  
 元弘三年癸酉五月十五日敬白

飽間齊藤三郎藤原盛貞生年廿六於武州符中五月十五日打死  
 同孫七家行廿三同死  
 飽間孫三郎宗長世五於相州村岡十八日討死  
 按太平記元弘三年癸酉五月十五日新田太郎源義貞與鎌倉戰于分陪十六日陷分陪營十八日燒村岡藤沢元瀨腰越而攻鎌倉大敗之

頃者嘗遇八王子防火什長小島文藏者其人語  
余而曰飽間者即赤馬也元弘中長州有奔藤三  
郎左門者居赤馬關仍氏飽間元弘之役志南  
帝之招以其子三郎盛貞弟孫三郎宗長孫七家  
行屬新田氏麾下而三士皆殺死矣

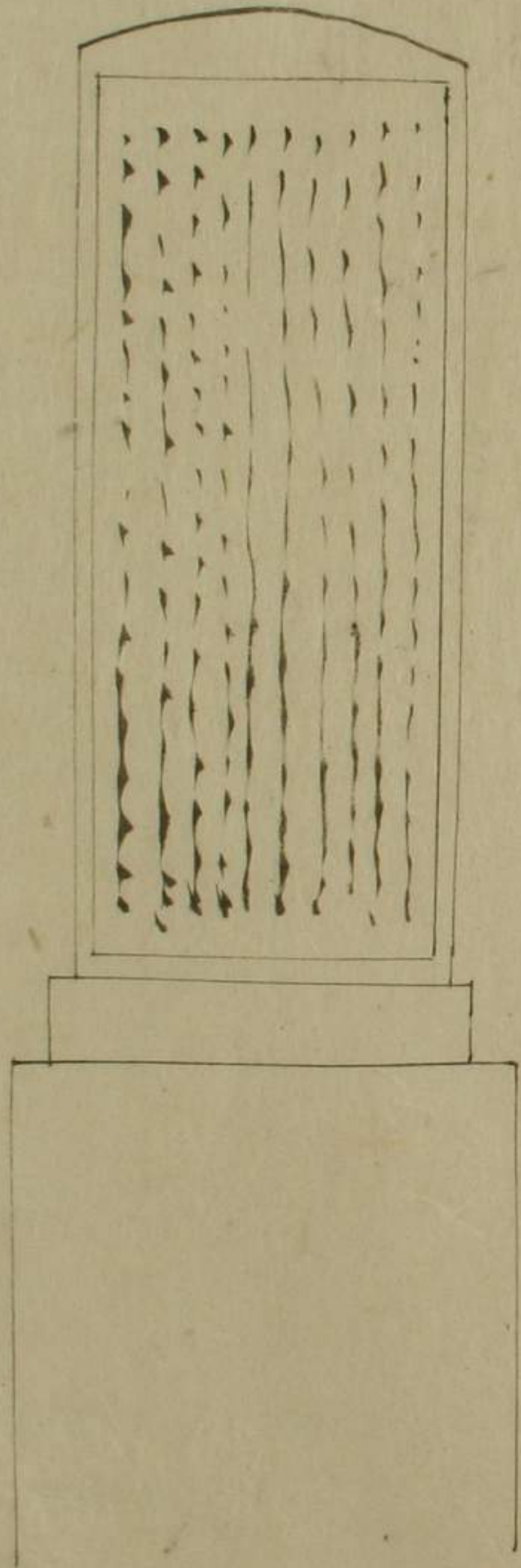
近江國日野綿向廟祝官先世所建云

二親幽靈並物故  
英成佛得道焉  
右平都波女志者為  
延慶三年十月十六日  
小舎人紀重方



下野國都賀郡日光山中禪寺銅碑

古碑亡寶永中乃再置



下野國都賀郡日光山中禪寺銅碑

古時所建泯焉失所在今所置則室永二年乙酉  
春三月  
一版掛石面寫鑄性命大夫園田某所改造也碑以銅  
版掛石面寫鑄性命大夫園田某所改造也碑以銅  
院僧運敬  
注行于世

沙門勝道歷山水瑩玄珠碑并序

蕪巔警嶽異人所都達水龍坎靈物斯在所以異人  
卜宅所以靈物化產豈徒然乎請試論之夫境隨心  
變心垢則境濁心逐境移境閑則心朗心境冥會道

德玄存至如能寂常居以利見妙祥鎮住以接引提  
山垂迹孤岸津梁並皆靡不依仁山託智水臺鏡瑩  
磨俯應機水者也有沙門勝道者下野芳賀人也俗  
姓若田氏神邈救蟻之齡意清惜囊之齒桎枷四民  
之生事調飢三諦之滅業厭聚落之夷夷仰林泉之  
皓然粵有同川補陀洛山葱嶺挿銀漢白峯衝碧落  
礮雷腹而翬吼翔鳳足而羊角魑魅罕通人蹊也絕  
借問振古未有攀躋者法師顧義成而興歎仰勇猛  
以策意遂以去神護景雲元年四月上旬跋上雪深  
巖峻雲霧雷迷不能上也還住半腹三七日而却還

又天應元年四月上旬更率攀陟亦上不得也二年  
三月中奉為諸神祇寫經圖佛裂裳裹足弃命殉道  
繼負經像至于山麓讀經禮佛一七日夜堅禱願曰  
若使神明有知願察我心我所圖寫經及像寺當至  
山頂為神供養以崇神威饒群生福仰願善神加威  
毒龍卷霧山魅前導助果我願我若不到山頂亦不  
到菩提如是發願訖跨白雪之皚々攀綠葉之璀璨  
脚踏一半身疲力竭憇息信宿終見其頂恍惚恍惚  
似夢似寤不因乘查忽入雲漢不啻妙藥得見神窟  
一喜一悲心魂難持山之為狀也東西龍卧彌望無

極南北虎踞棲息有興指妙高以為禱引輪鐵而作  
帶笑衝岱之猶卑晒崑香之又劣日出先明月來晚  
入不暇天眼萬里目前何更乘鷗白雲足下百種靈  
物誰人陶冶北望則有湖約計一百頃東西狹南北  
長西顧亦有一小湖合有二十餘頃眇坤更有一大  
湖畧計一千餘畝東西不潤南北長遠四面高岑倒  
影水中百種異莊木石自在銀雪敷地金華發枝池  
鏡無私萬色誰逃山水相映乍看絕腸瞻佇未飽風  
雪趁人我結蝸菴于其坤角住之禮懺勤經三七日  
已遂斯願便歸故居去延曆三年三月下旬更上經

五箇日至彼南湖邊四月上旬造得一小舩長二丈  
廣三尺即與二三子棹湖游覽遍眺四壁神麗夥多  
東看西看汎濫自逸日暮興餘強託南洲其洲則去  
陸三十丈餘方圓三十丈餘諸洲之中美華富焉復  
更游西湖去東湖十五許里又覽北湖去南湖三十  
許里並雖盡美總不如南其南湖則碧水澄鏡深不  
可測千年松栢臨水而傾綠蓋百圍檜杉竦巖而構  
糾縳五彩之花一株而雜色六時之鳥同響而異聲  
白鶴舞汀紆鳧戲水振翼如鈴吐音玉響松風懸琴  
坻浪調鼓五音爭奏天韻八德澹々自貯霧帳雲幕

時々難陀之罽罽星燈電炬數々普香之把束見池  
中圓月知普賢之鏡智仰空裡惠日覺遍智之在我  
託此勝地聊建伽藍名曰神宮寺住此修道荏苒四  
祀七年四月更移住北涯四望無碍沙場可愛異華  
之色難名驚目奇香之臭已尋悅意靈仙不知何去  
神人髣髴如存念歲精之無記惜王侯之不遊思餓  
虎而不遇訪子喬而適去觀華藏於心海念實相於  
眉山葢蘿遮寒蔭葉避暑喫菜喫水樂在中乍乍乍  
了出塵外九臯鶴聲易達于天去延曆中栢原皇帝  
聞之便任上野國講師利他有時虛心逐物又建立

華嚴精舍於都賀郡城山就此往彼利物弘道去大  
同二年國有陽九州司令法師祈雨師則上補陀洛  
山祈禱應時甘雨霽霽百穀豐登所有佛業不能縷  
說咨日車難駐人間易變從心忽至四蛇虛羸撰誘  
是務能事畢矣前下野伊博士公共法師善秩滿入  
京于時法師歎勝境之無記要屬文於余筆伊公共  
余故固辭不免課虛抽毫乃為銘曰  
雞黃裂地粹氣昇天蟾烏運轉萬類躡闐山海錯峙  
幽明殊阡俗波生滅真水道先  
一塵構嶽一滴深湖埃消委聚畫飭神都嶺峯不撓

嶽鳥巖鳥無圖皚々雲嶺曷曠誰盧

沙門勝道行操松柯仰之正覺誦之達磨歸依觀音  
禮拜釋迦殉道斗教直入嵯峨龍跳絕巘鳳舉經過  
神明威護歷覽山河

山也崢嶸水也泓澄綺華灼々異鳥嚶々地籟天籟  
如筑如箏異人乍浴音樂時鳴

一覽消憂百煩自休人間莫比天上寧儔孫興擲筆  
郭詞豈周吐哉同志何不優遊

弘仁之年敦牂之歲月次壯朔三十之癸酉也  
人之相知不必在對面久話意通則傾蓋之遇也余

山也崢嶸水也泓澄二句恐  
轉側澄即蒸氣下六押庚  
韻不合崢即庚韻

其道公生年不相見幸因伊博士公聞其情素之雅  
致兼蒙請洛山之記余不才當仁不敢辭讓輒抽拙  
詞并書絹素上詞翰俱弱深恐玄之猶白寄以瓦礫  
表其情至百年之下莫忘相憶耳

### 西岳沙門遍照金剛題

重建沙門勝道上補陀洛山碑記

人藉靈境以進道境因勝人而彰名如補陀洛山  
亦其微哉勝道上人創窮其頂精練功成弘法大  
師揮天縱才文之華詳矣於是世人昭々知其為  
名山也其文則載性靈集傳到于今而其碑則歷

年逾邈拂地不存嗚呼廢而不興非人情也近者  
余昂樹負珉刻其文焉庶乎使登臨者讀雄文以  
審靈境知靈境誠為進道之緣矣然則此拳豈曰  
無所係乎世有高談淨心蔑視山水者不亦謬乎  
因題碑陰聊紀歲月云

時

寶永二年歲次乙酉春三月前天台座主

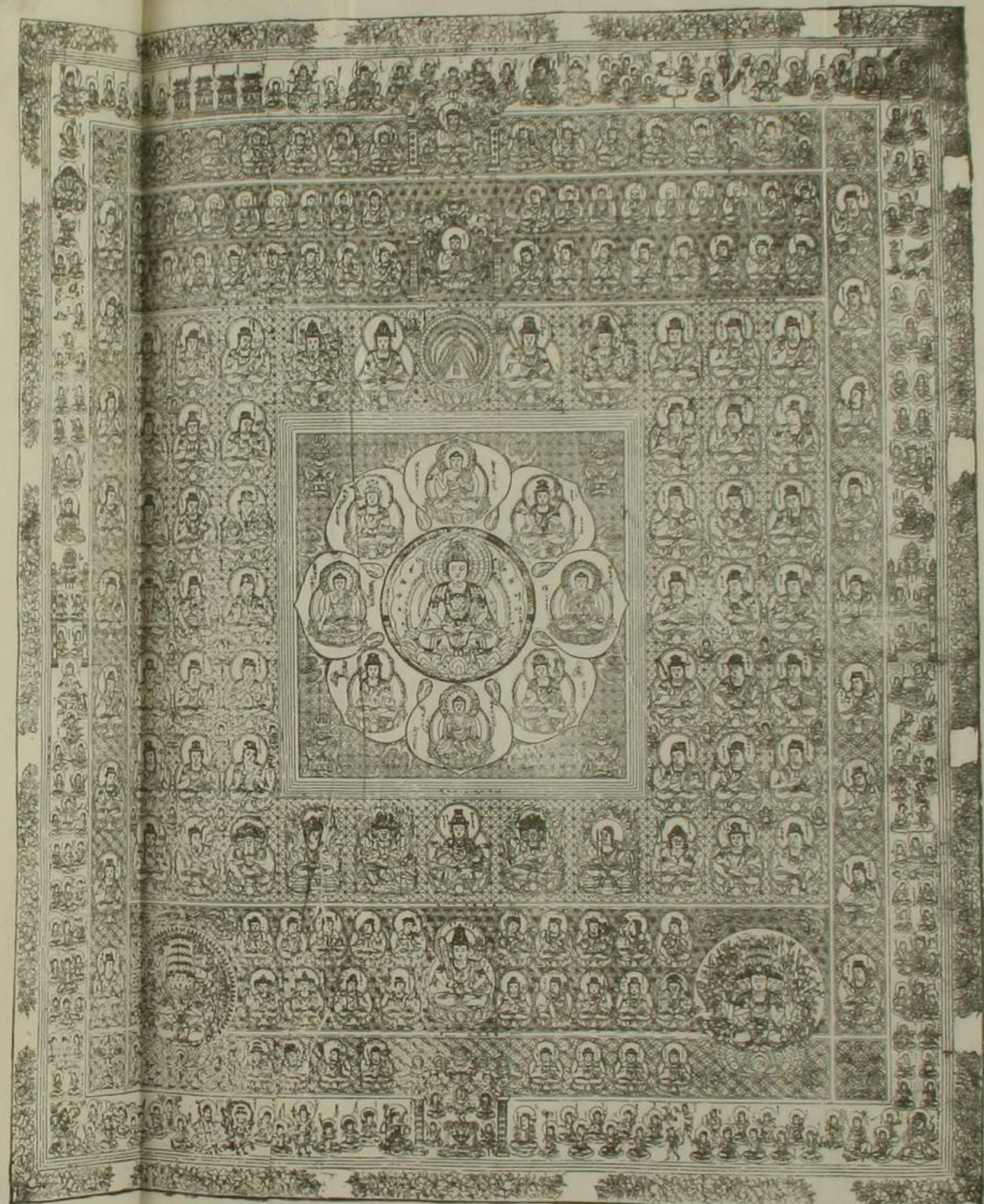
一呂公辨親王識

監事 蘭田備前守從五位下藤原秀英

山城國守治郡大澤村蓮花寺藏瓦碑

縱六寸七分  
橫九寸  
厚一寸八分

從五位上守右衛  
士督兼行中宮亮  
下道朝臣真備葬  
正妃楊貴氏之墓  
天平十一年八月十  
二日記  
歲次己卯



(高雄山神護寺藏)

羅 茶 曼 界 藏 胎

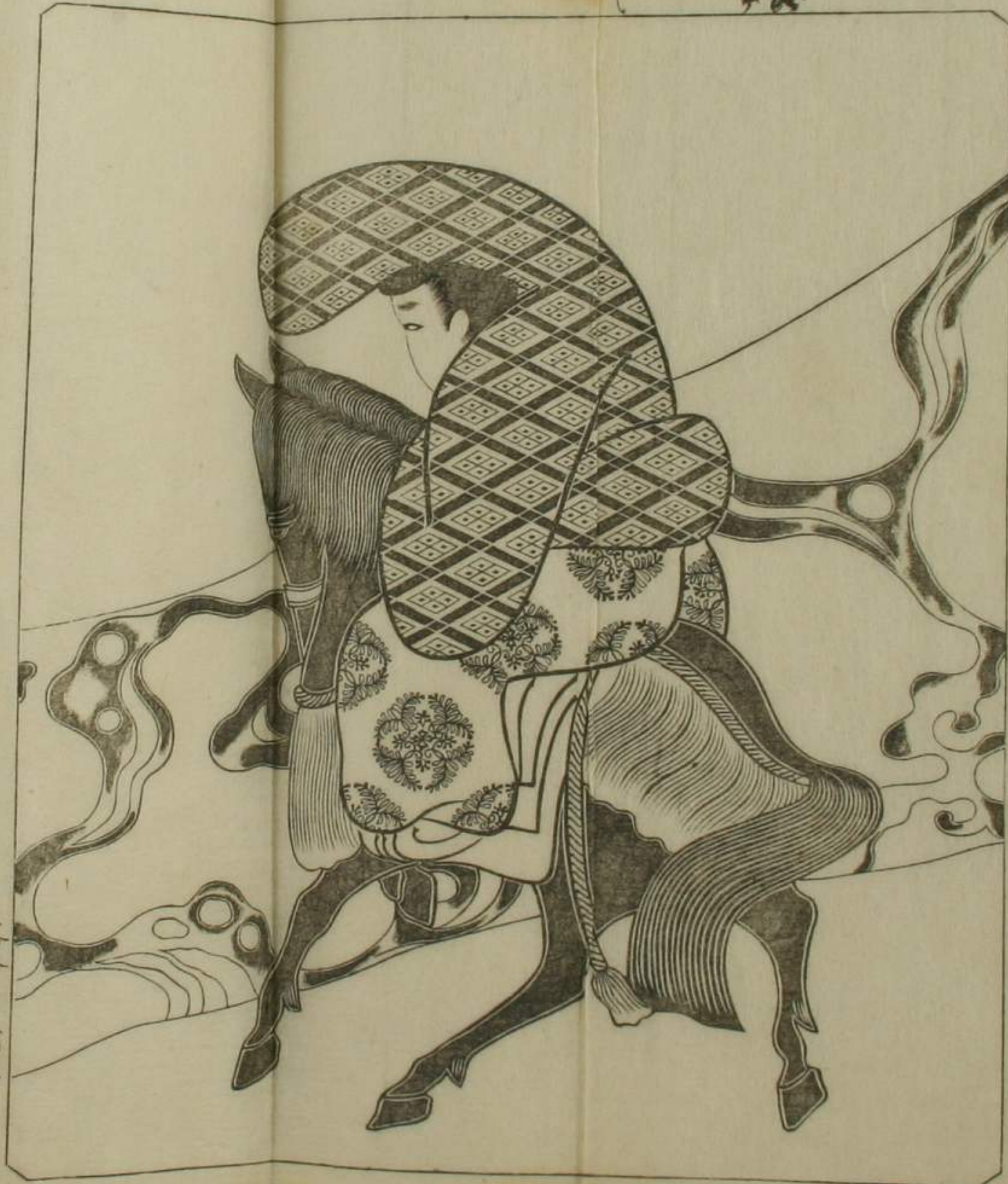


尾形光琳作硯箱

三分々二縮写

春整居梅産蔵

蓋 寸法 竪八寸横七寸厚五分  
 内外共地惣全泥粹  
 玉縁也地惣全  
 面如毛力子直衣螺鈿紋全  
 直衣青貝裝金筋  
 黒くり筋全  
 指貫カサ貝紋金黒くり筋  
 馬錫鞆鎧総全置上ケ  
 波青金カサ銀枝カ不埋也  
 硯及水滴箱の内外の  
 全圖ハ新撰光琳百圓  
 子裁カサハハカサ子カ符



落合芳幾摹

外箱同入書

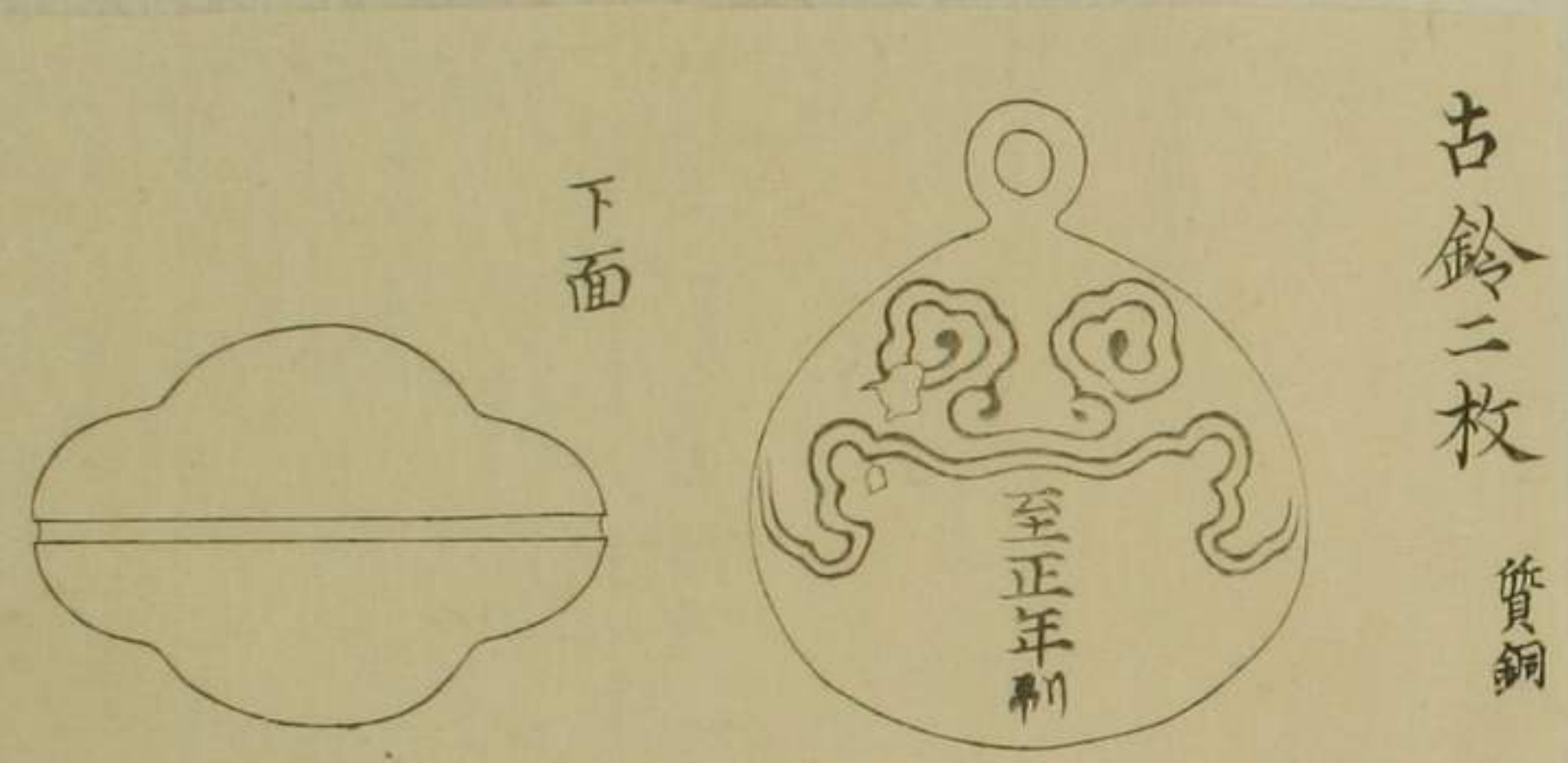
竖九寸

依野渡觀集

横八寸五分

書光緒造

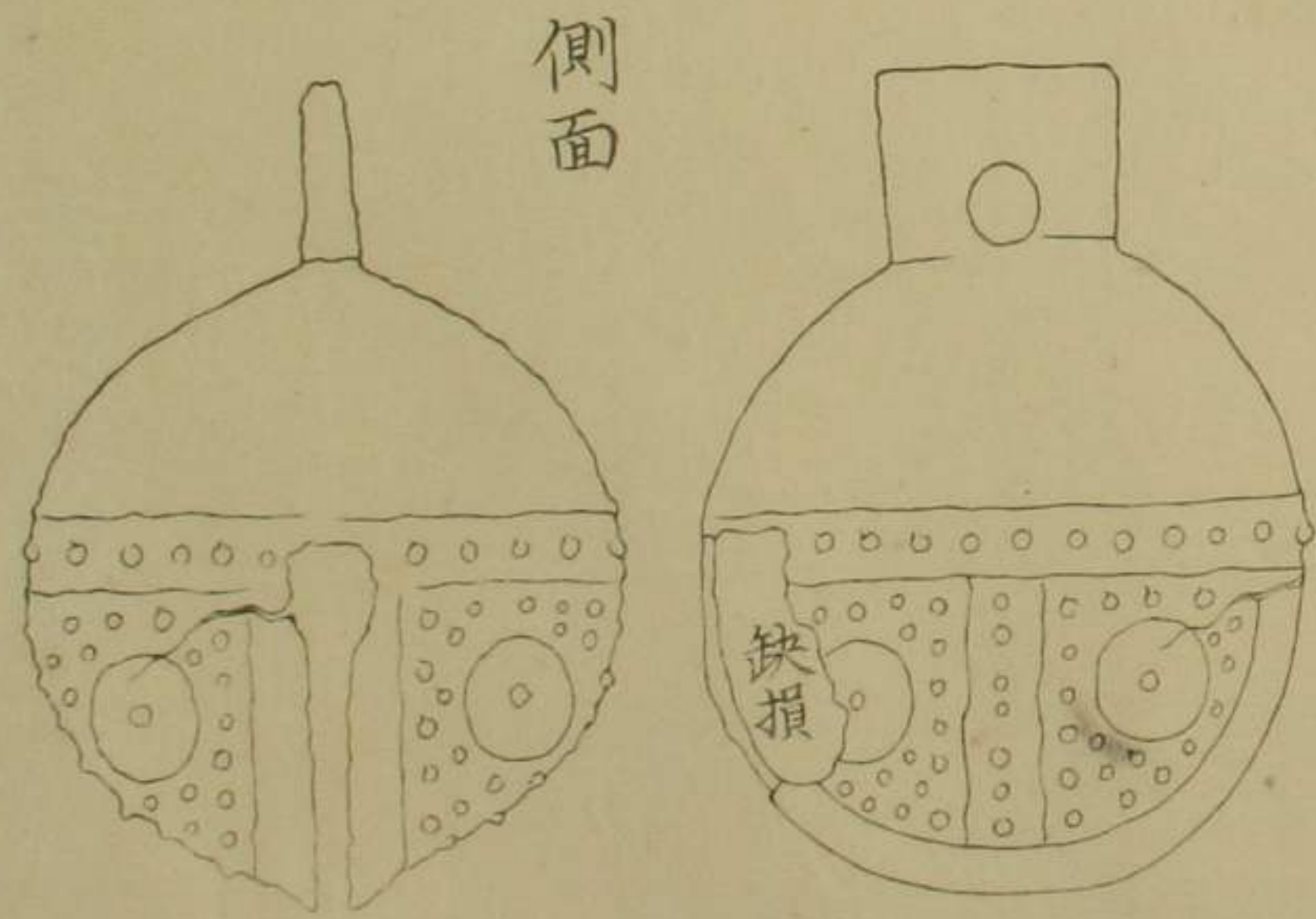




下面

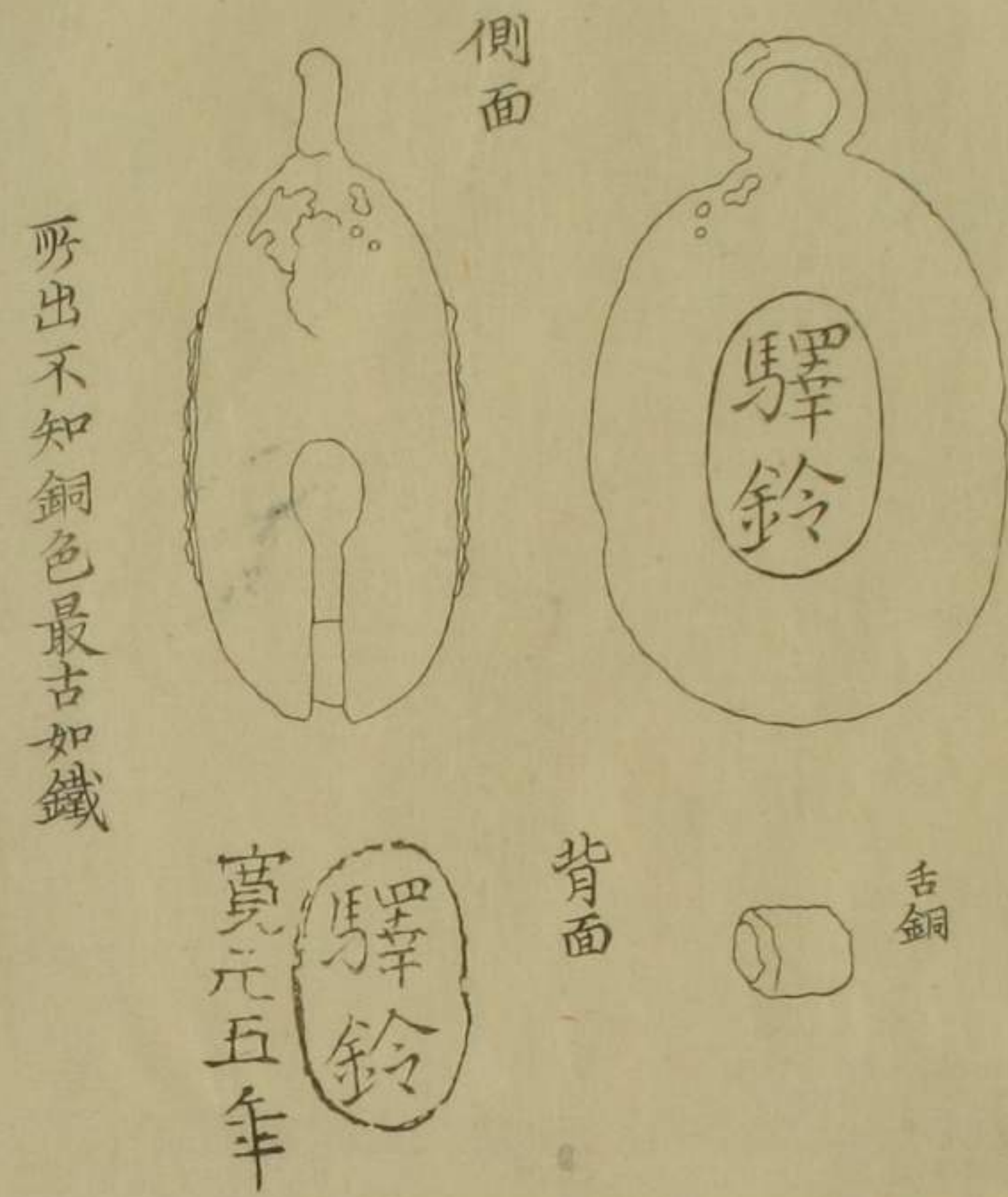
古鈴二枚

質銅



側面

長井十足藏



側面

所出不知銅色最古如鐵

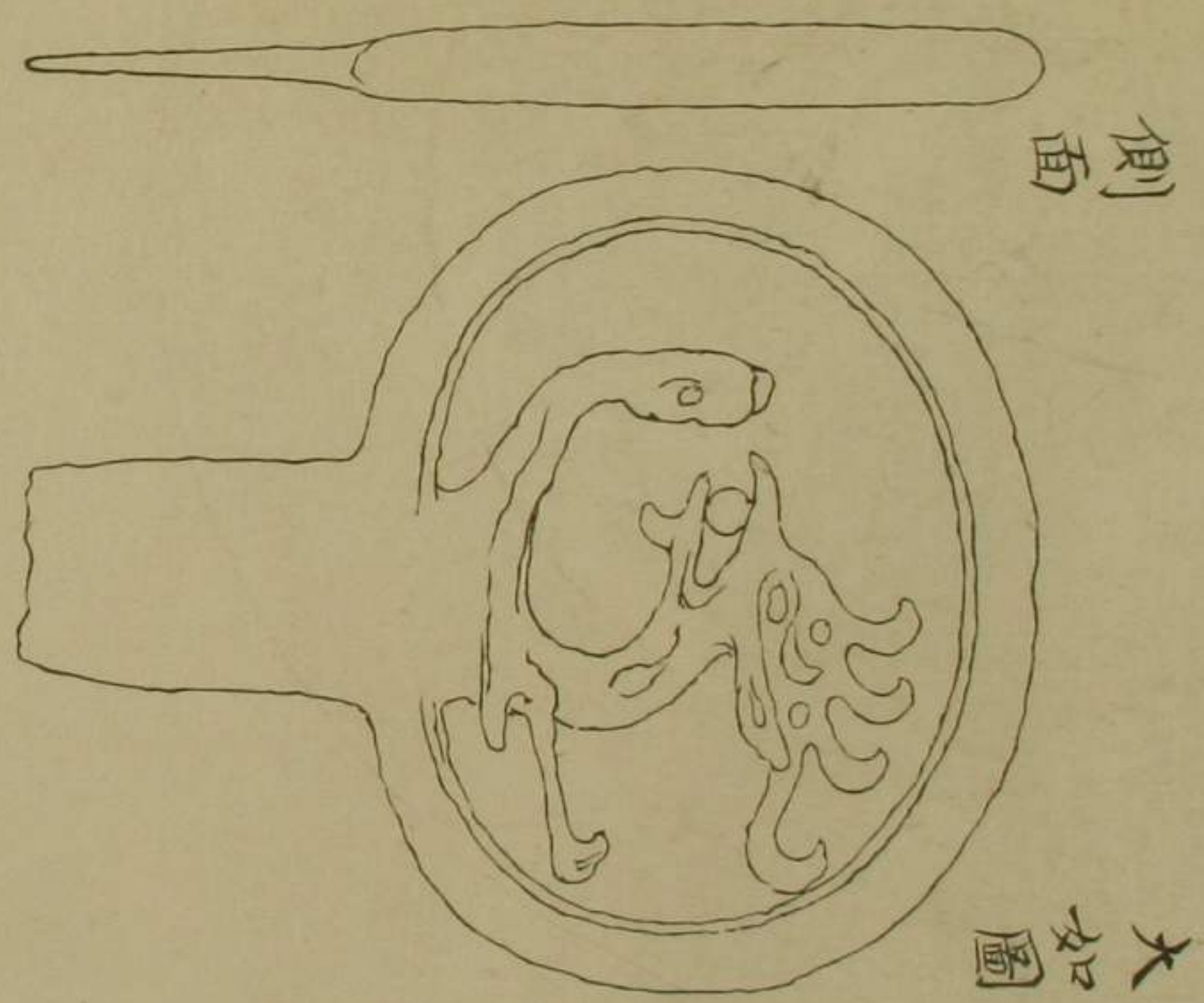
背面

吉銅

驛鈴 大如圖下做此

福羽家藏

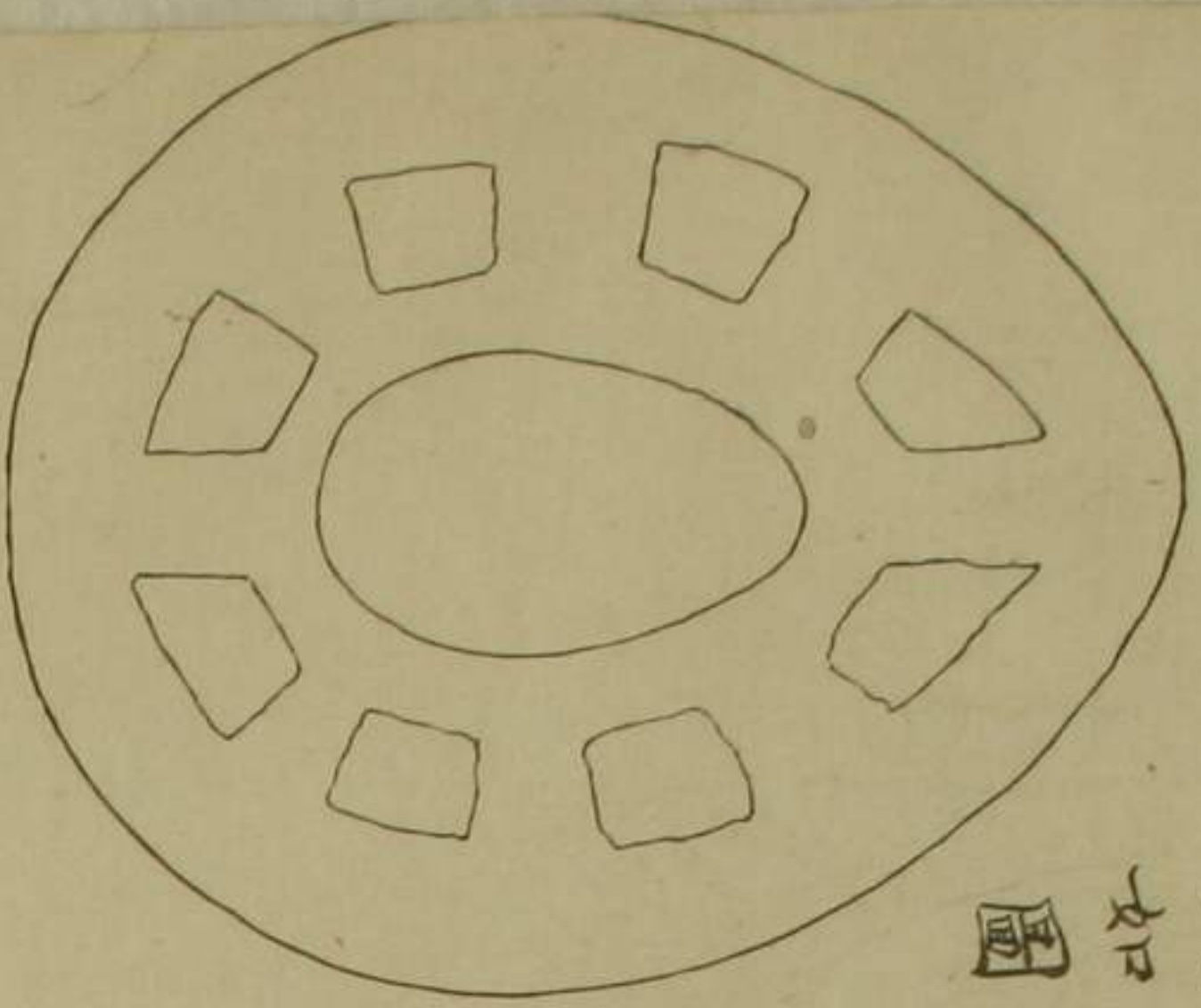
鳥首大刀金具 銅質鍍金 古川汲古藏



大如圖

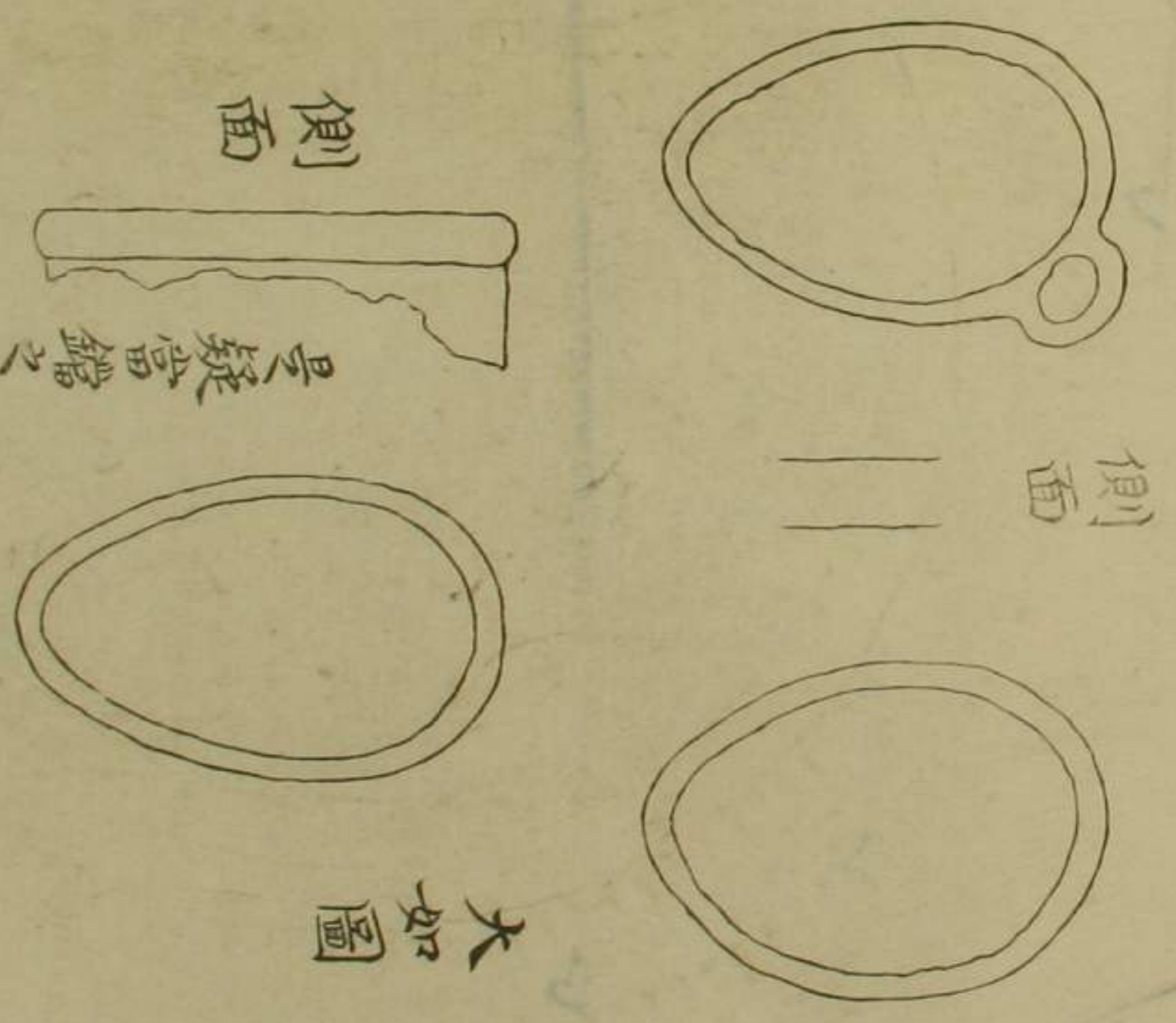
側面

古鏢 銅質鍍金 同藏



大如圖

鞘金具 質同上 同藏



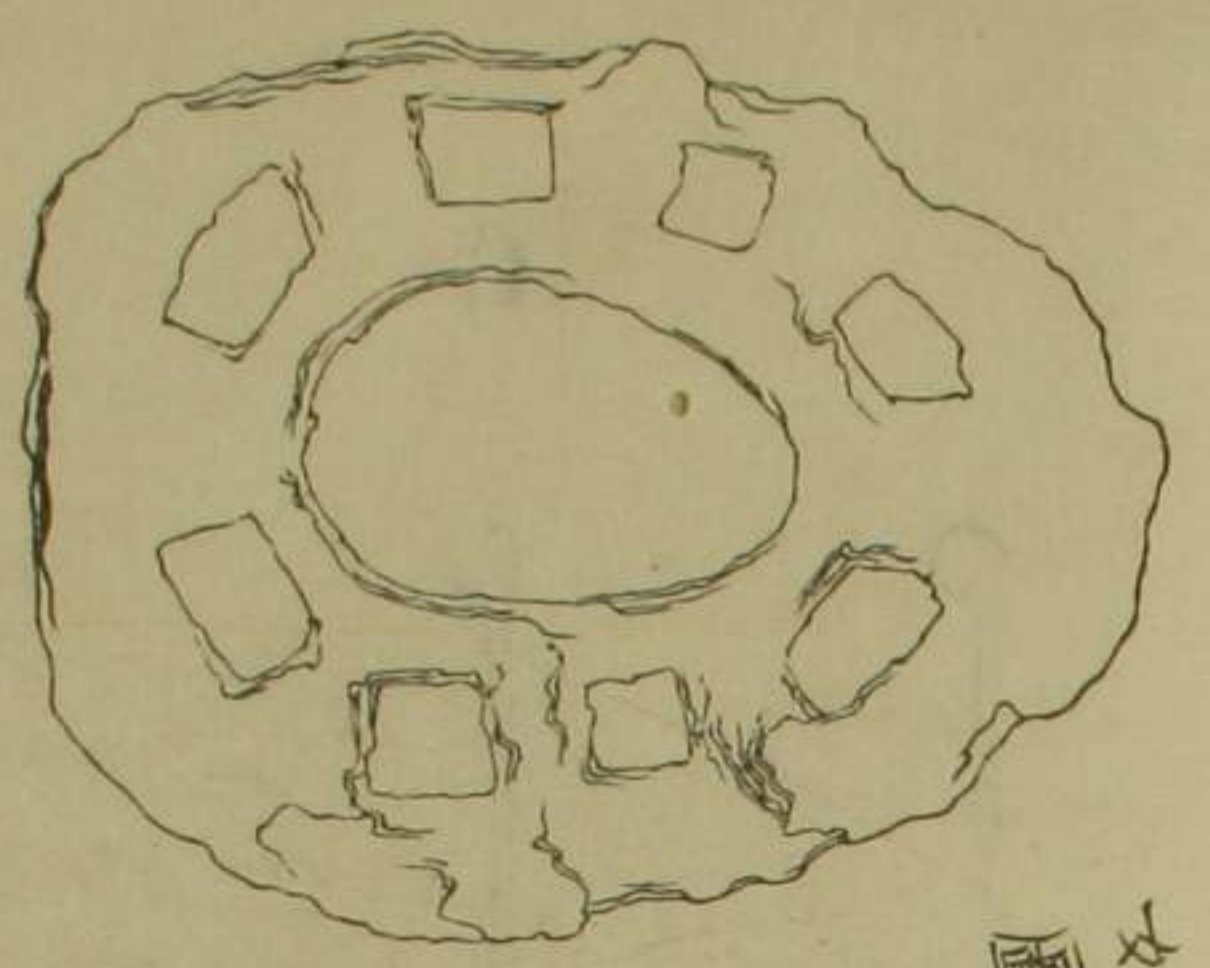
側面

大如圖

是疑當鑑之缺損

側面

同質鐵 長井十足藏



大如圖

常陸麻井村与在常文春  
所領事

永德三年  
八月一日  
佐竹義貫  
伊豫

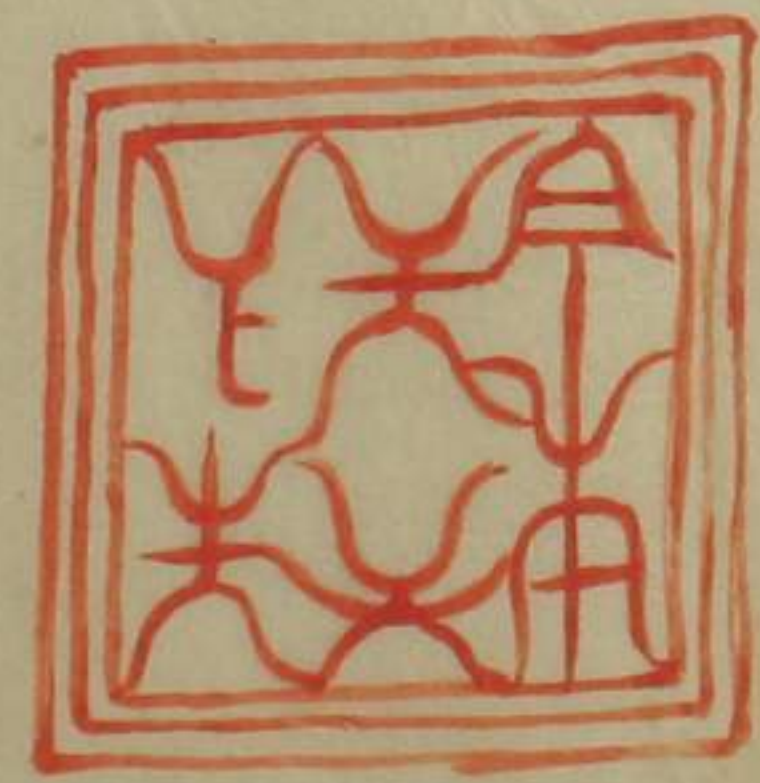


武田在东京大夫信直朱印



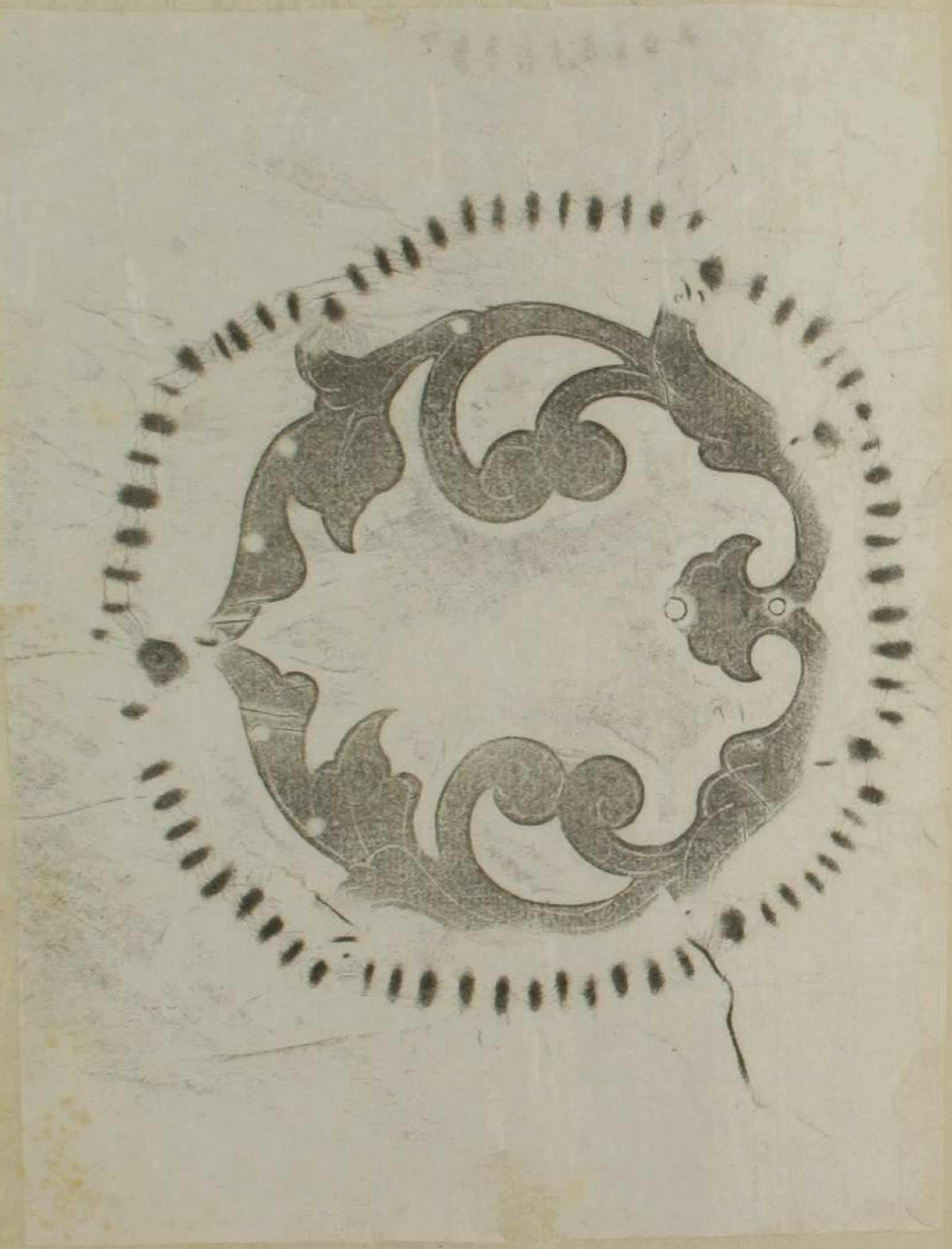
甲  
塩山河岳寺所藏文春所標

中山信能云古河公方印  
日本王天下主



永德三年文春所標  
佐竹義貫印



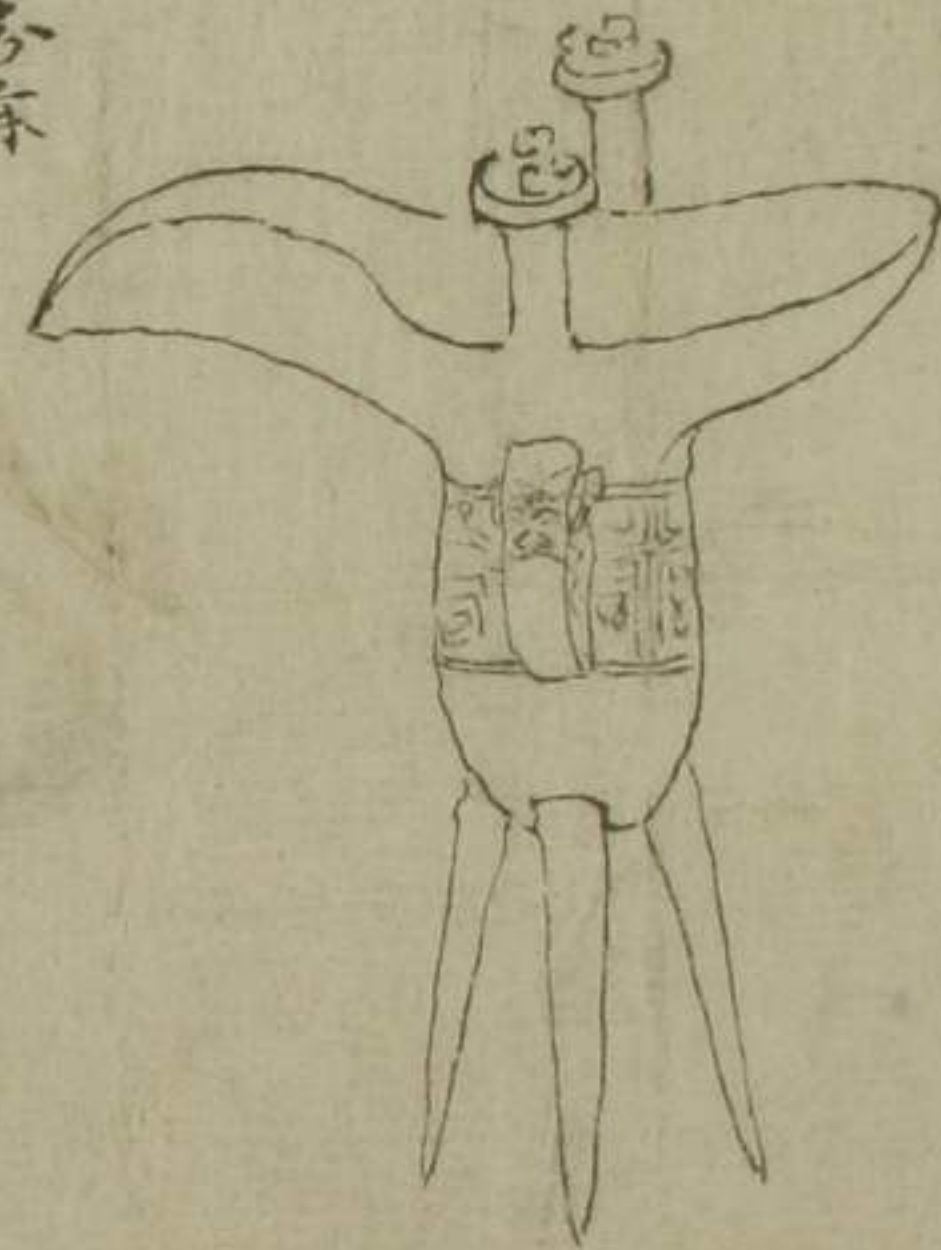


永  
保  
二  
年  
帖

信  
玄  
册

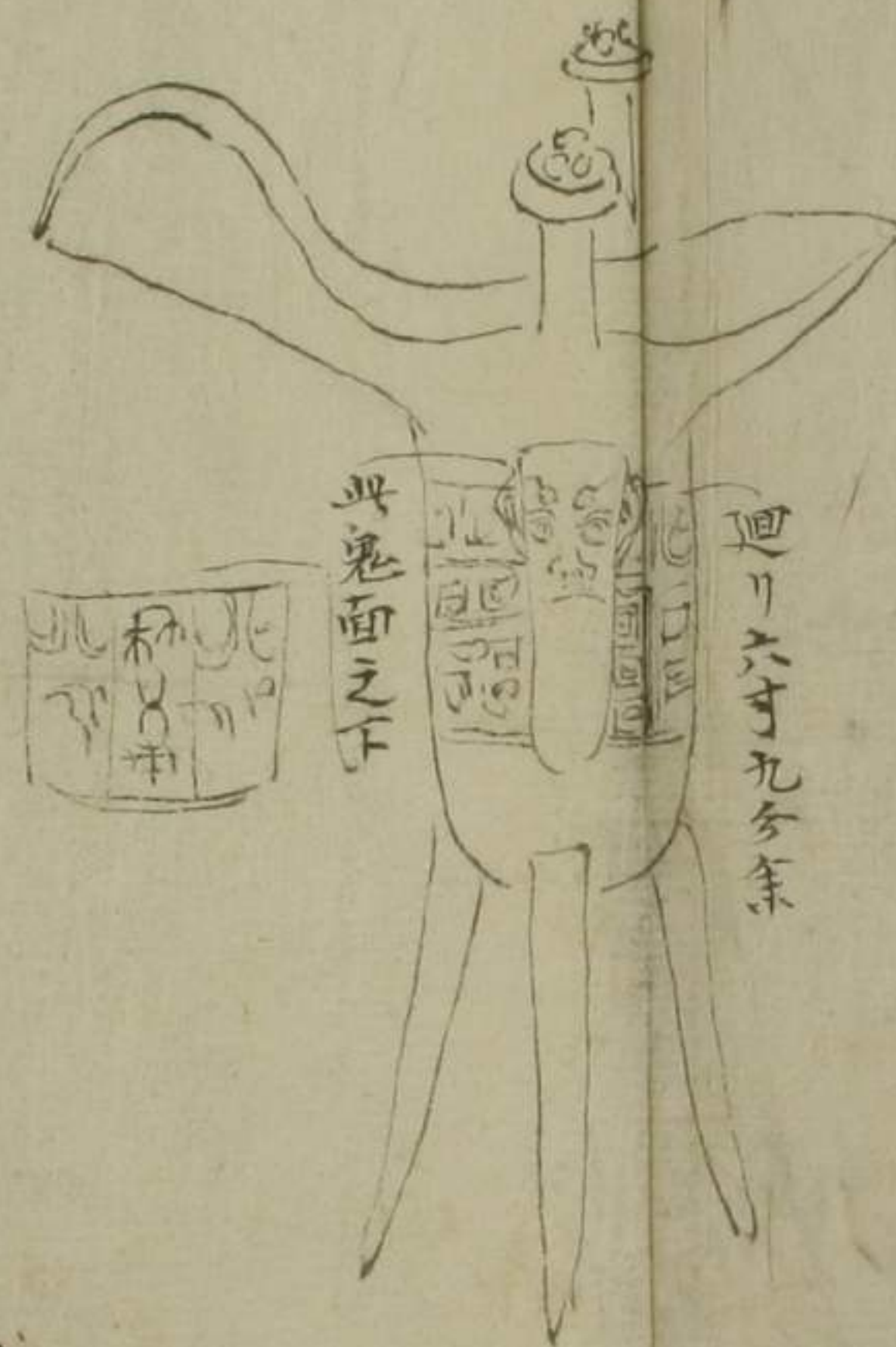
信  
玄  
册

箱書付 高爵



差  
上邊五寸五分余  
高七寸三分程

廻リ六寸九分余



此鬼面之下

鬼面平ノ下銘三文字



右 上総国勝山平井某所藏

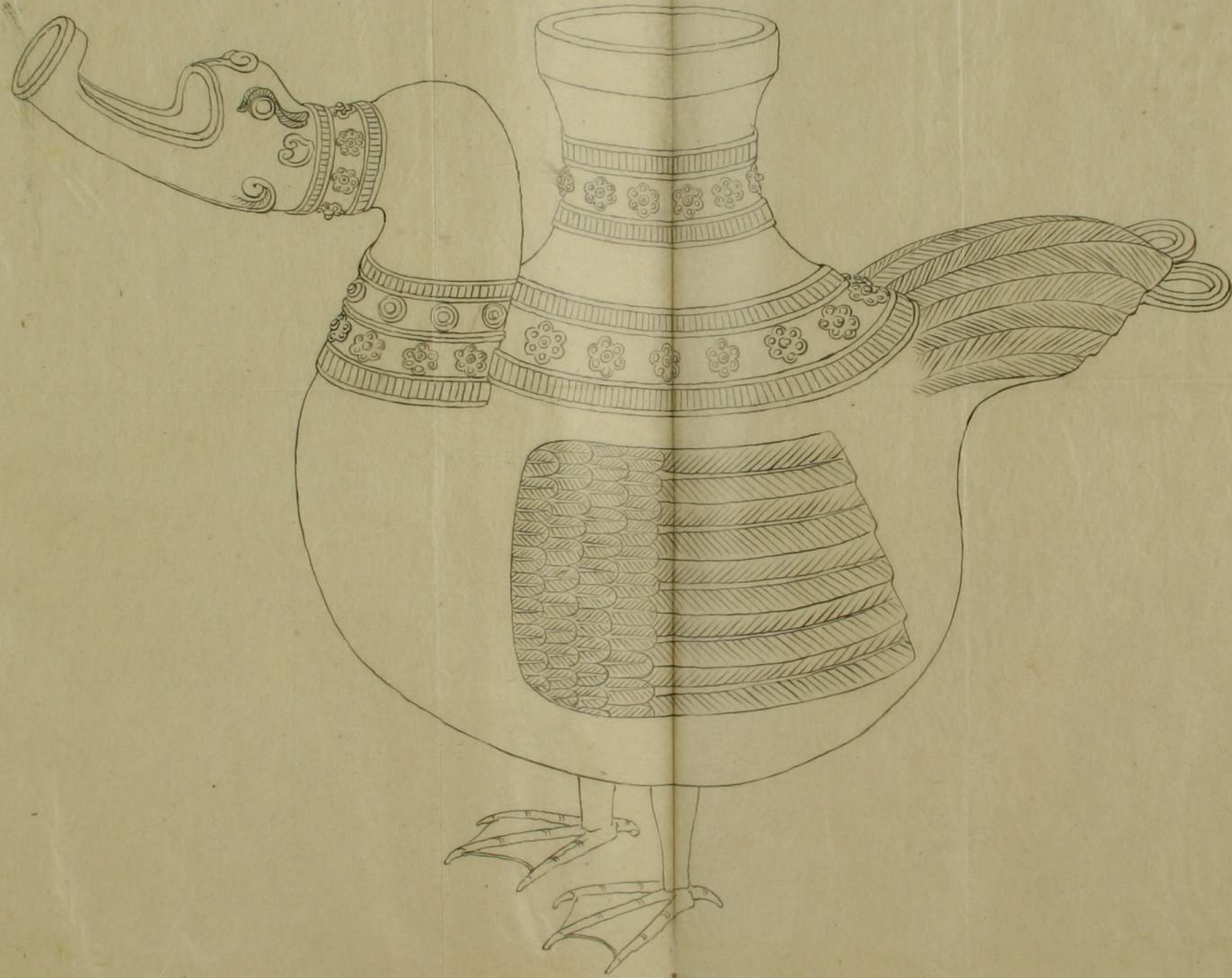


九曜星の図

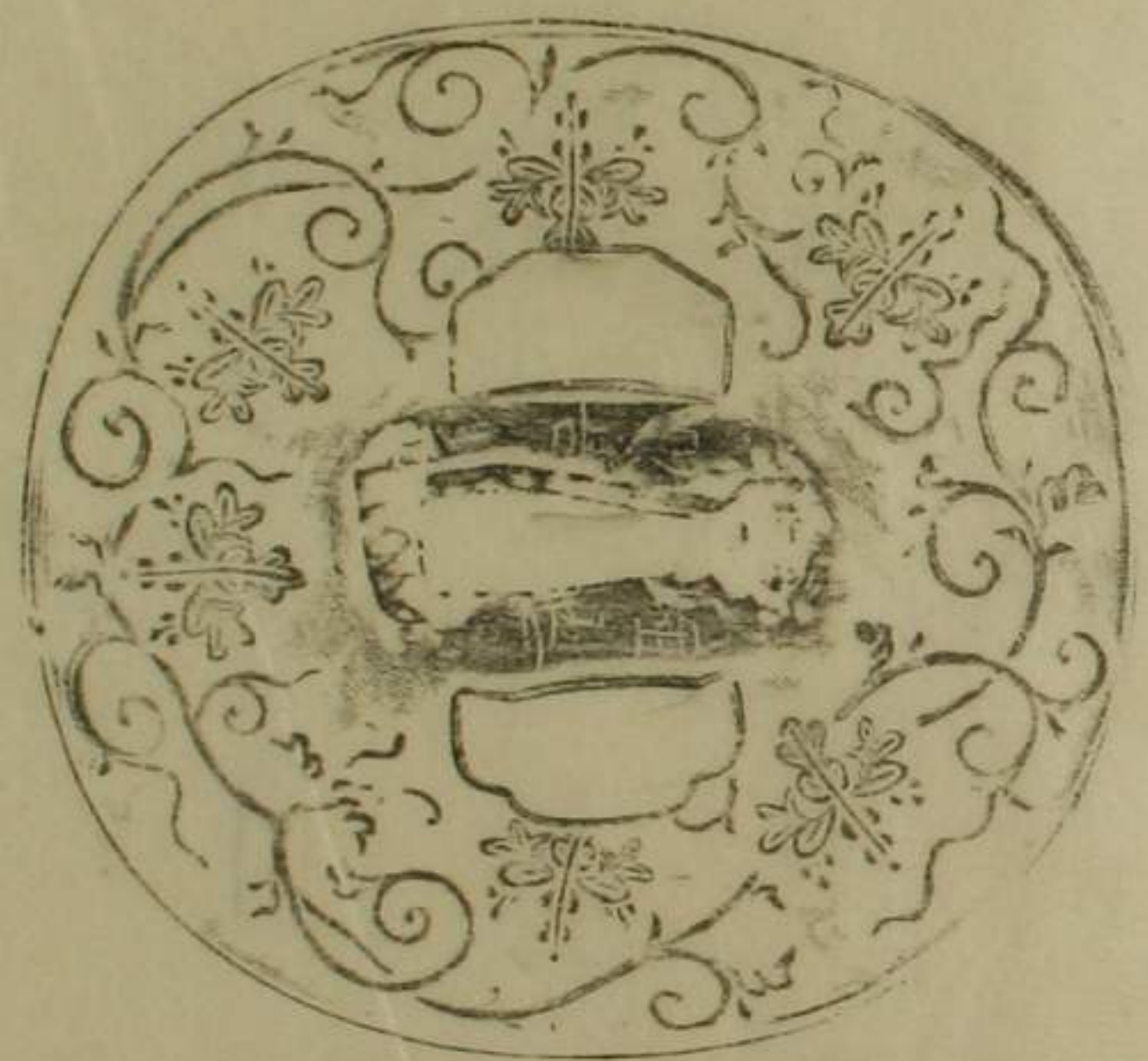


鸞壺

圖小於器十分之二有半



右鸞壺高七寸四分有半自頭至尾一尺七分  
口徑二寸三分深六寸一分厚一分有奇足高  
一寸四分腹前後徑六寸四分左右徑五寸容  
京外一升零五勺重九百九十五錢無銘識蓋  
審其銅質色澤非隋唐以後物也



如銅魚子金象眼

七  
子  
山

あ  
ま  
り  
の  
こ  
ろ

楊  
美  
の  
是  
の  
心  
の  
こ  
ろ

了  
好  
連  
代  
勤  
之  
心

花  
の  
散  
り  
散  
り

泊  
酒  
主人

維家齊年歲來甲子朔癸酉  
國恭謙後四伍下陸爾國世來德  
世守鎮年嗣拚擊勳四等紀  
講廣然文女吉繼萬卷志

元日

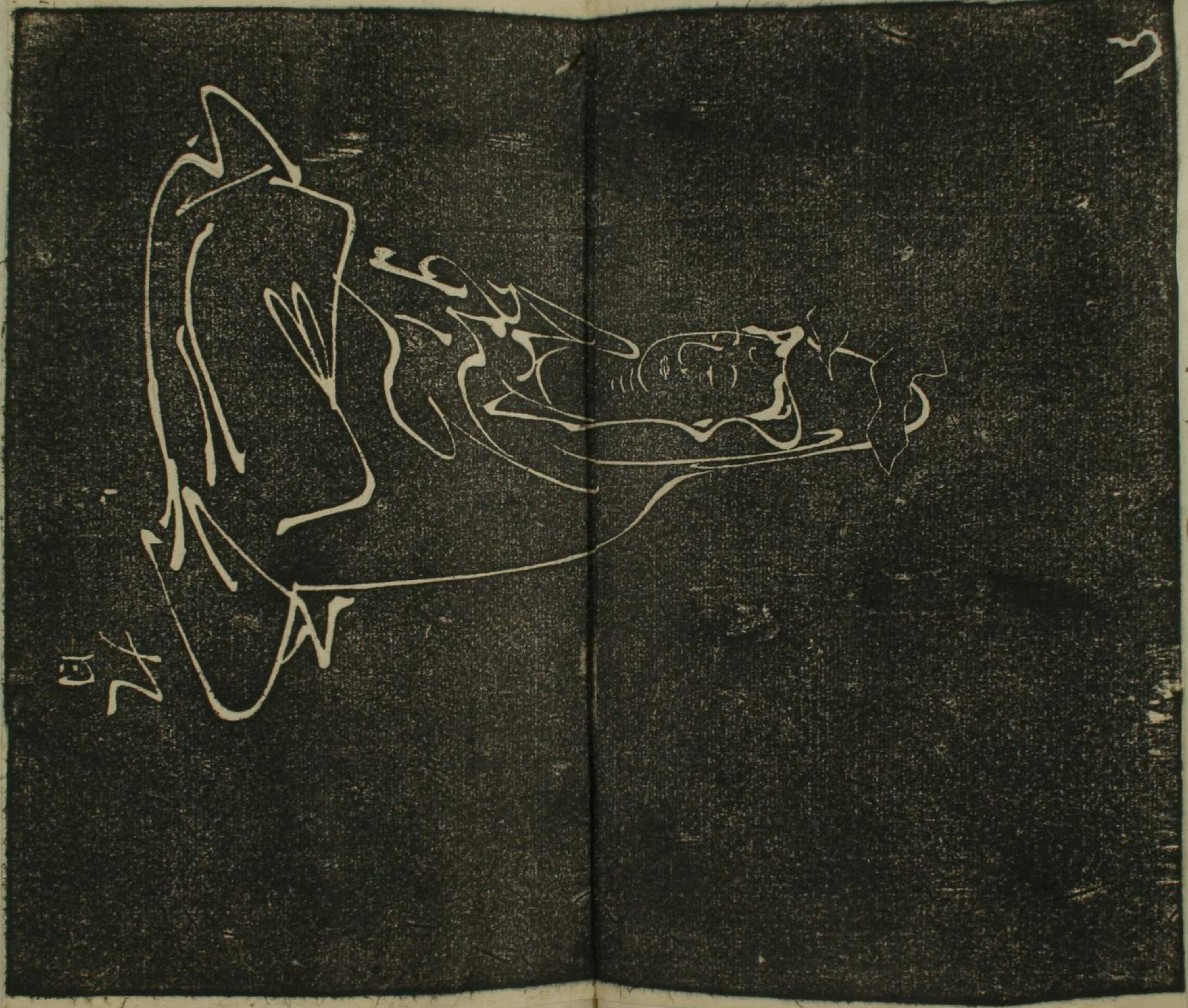
西九著御

御地唐綺



同二日  
御地唐綺

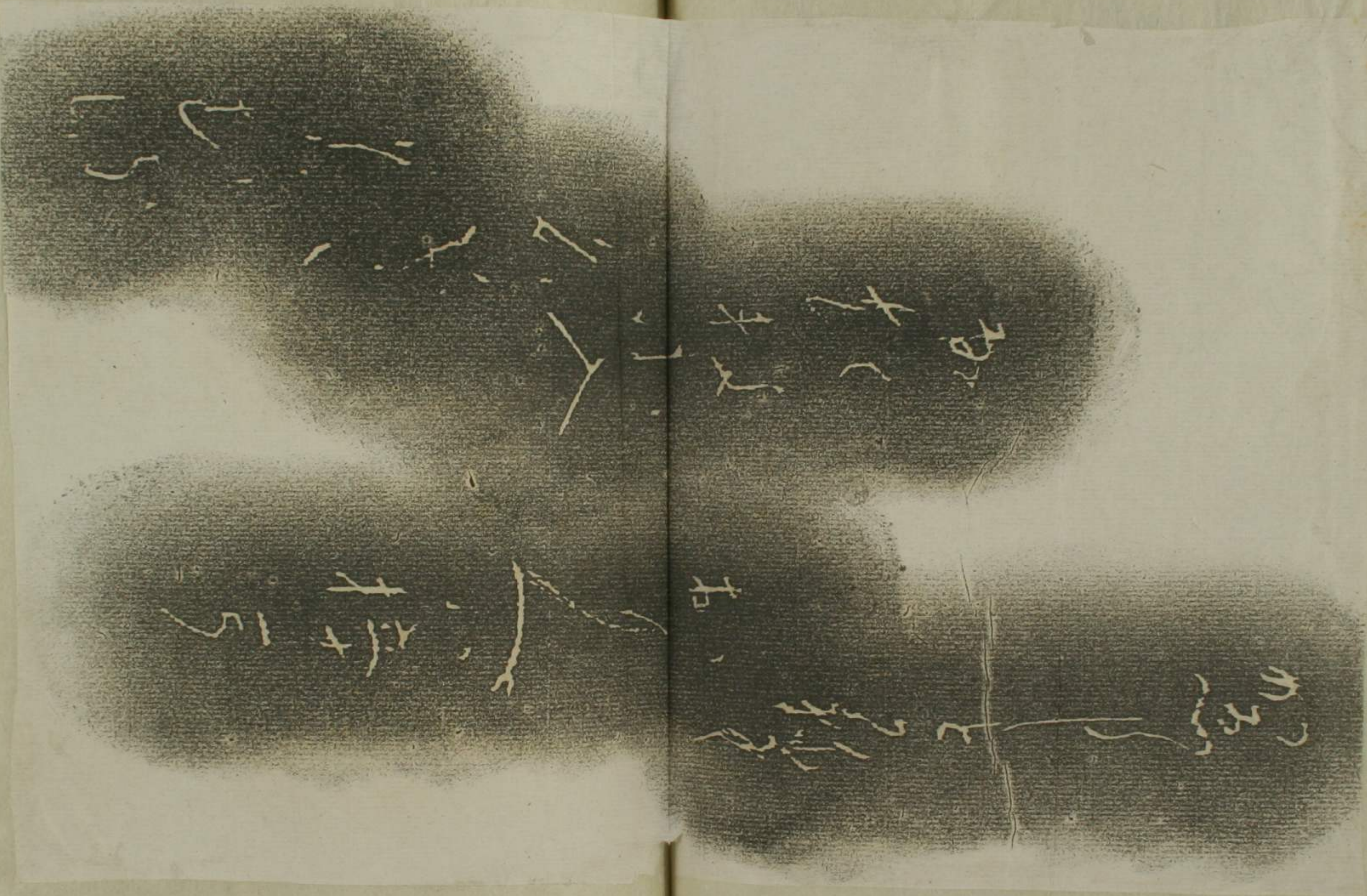




九月

右大臣宣朝之画



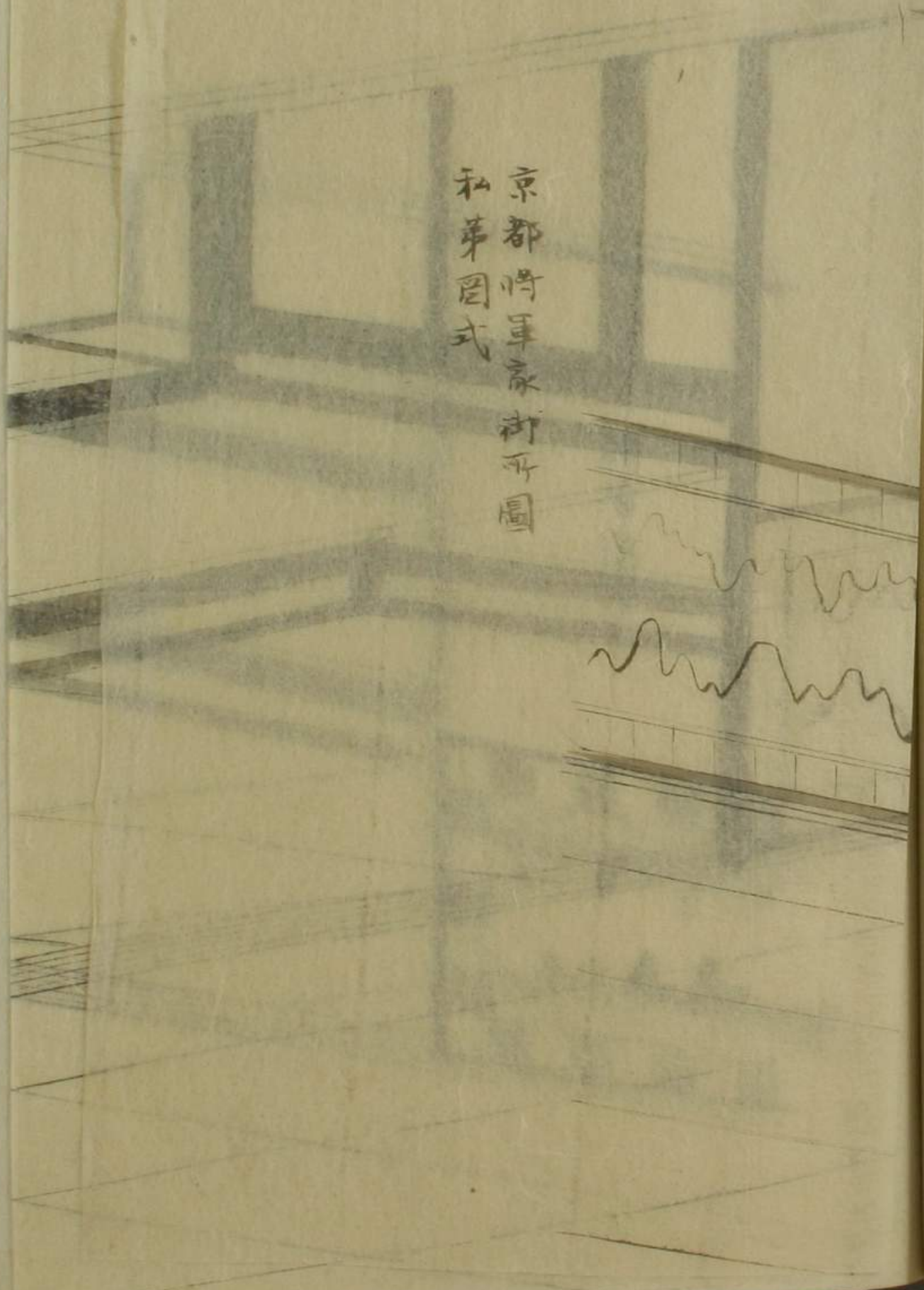


如去輪の鐵石

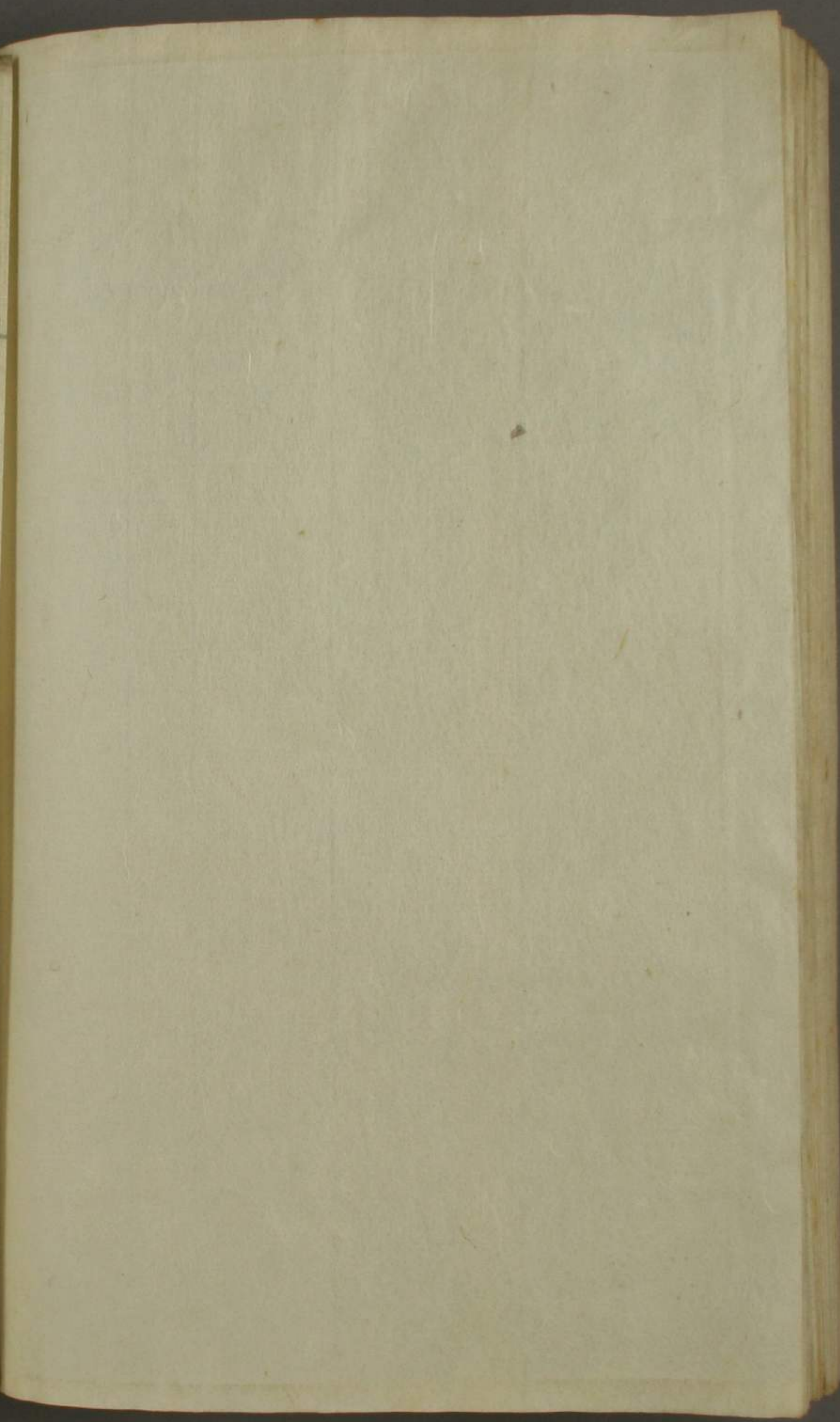
Handwritten text in cursive Japanese calligraphy, partially obscured by the ink blot. The characters are difficult to decipher but appear to be arranged in several lines.

Handwritten text in cursive Japanese calligraphy, partially obscured by the ink blot. The characters are difficult to decipher but appear to be arranged in several lines.

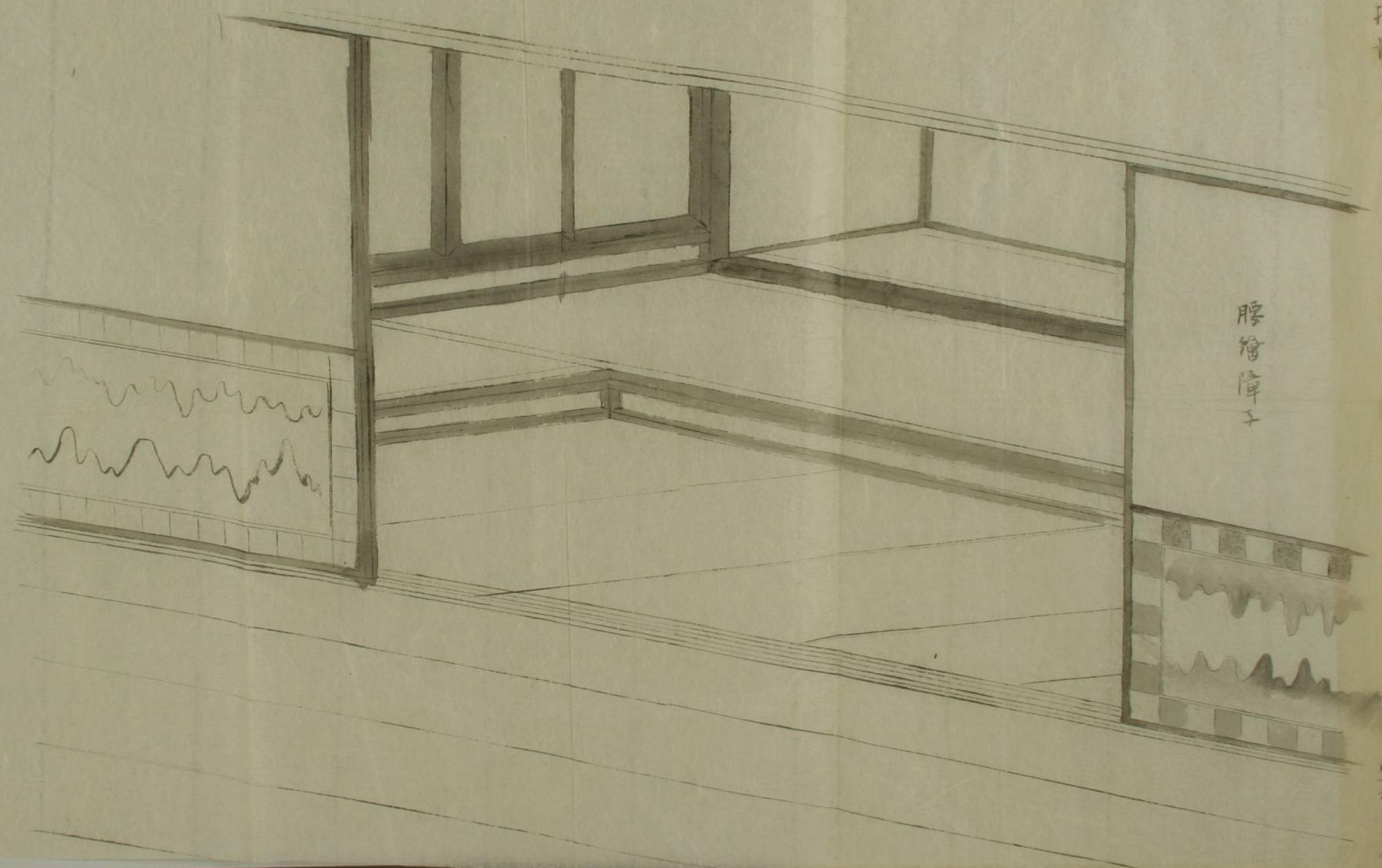
Handwritten text in cursive Japanese calligraphy, partially obscured by the ink blot. The characters are difficult to decipher but appear to be arranged in several lines.



京都將軍家御所圖  
私第圖式



堀川御所指當



京都將軍家御所圖  
私第圖式

腰繪障子

四一七二十廿

離屋立圃百像

正伯画 自賛

絹本着色 豆物長二尺六寸五分 横七寸九分半  
賛ハ上子あり全幅編習谷文晁の本朝画集ニ  
之



伊藤聽雨蔵



是乃我塚やうそく愚長生白の

うそく愚長生白の

かきまへにえやハ

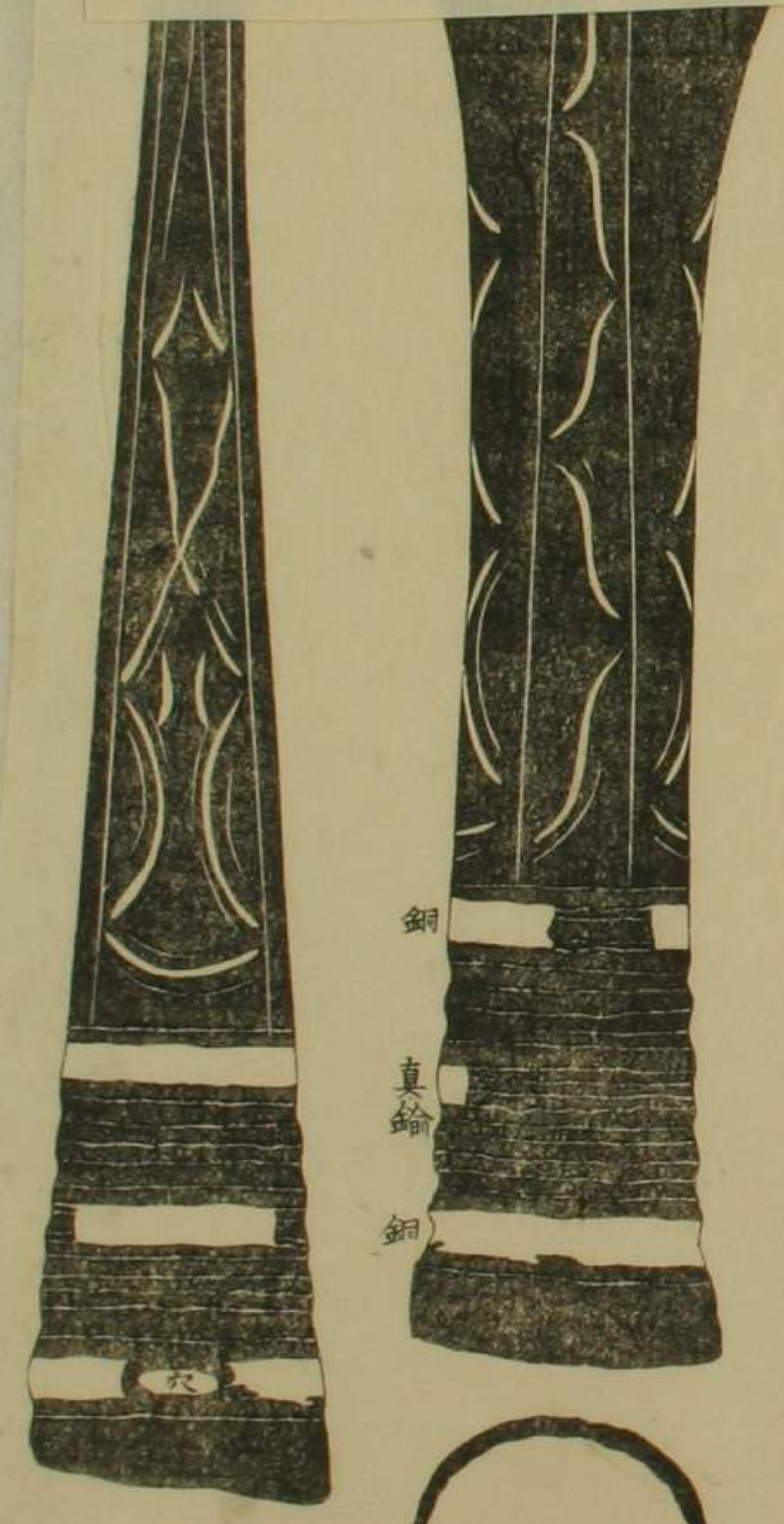
能ひ乃乃年名玉



此劍真鍮

用劍

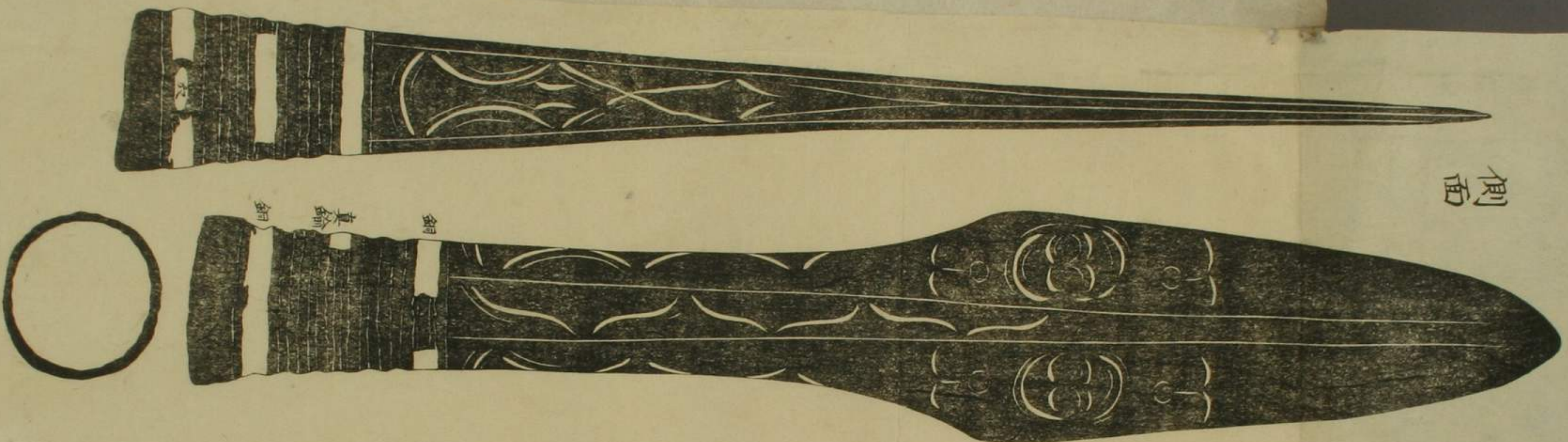
鐵鉞 大如圖



銅  
真鍮  
銅

松浦弘蔵

側面



北海道釧路國上川郡土中所得鐵鉞 大如圖

松浦弘藏

松浦弘藏

松浦弘藏





唯杞無以采中丞所萃

驗南陽無河內又類於

之可制

唐傳昧香會

子多小物也中丞乃多類於之類の  
う毎余いふるや、うなる秋去

あつた

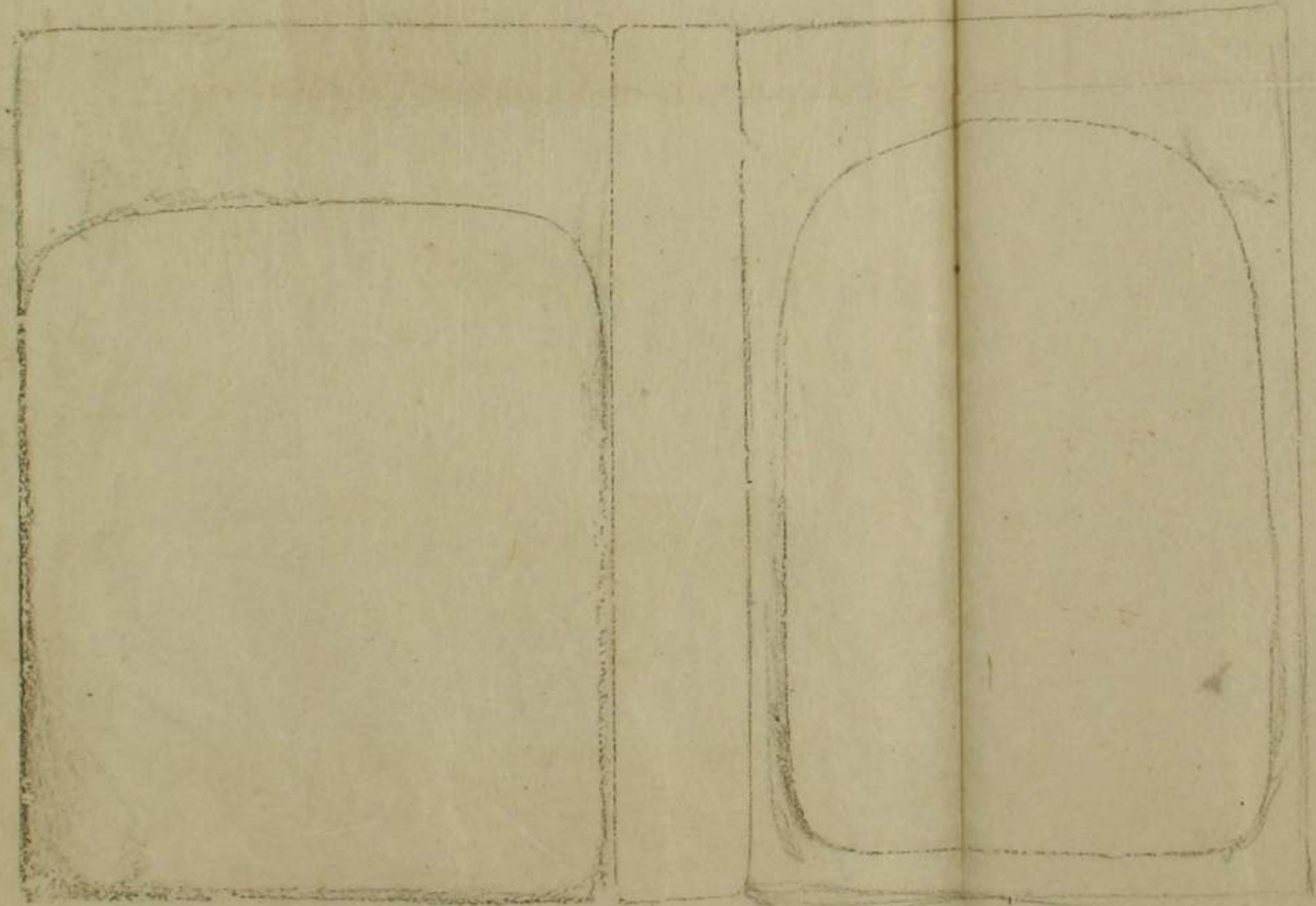


西後印事

東郊門外數楊家  
隱几蕭條境泐佳  
居士對雲閣帝壁  
檐間殊日度香篆  
小池新水鏡亭自  
斜徑香泥燕巢花

不恨頃來風雨惡  
稍留春色包報學母

石生



不悉文庫

家系印陳列

乃檢取

明治四十年三月



伴代及子行

神名帳標目松考 草稿

此考書ハ延キ式ヲ神名帳の首に標目ヨリツテそと  
 一ツケルニ事モこころニテ所成式の中を  
 考合セコウノのち々ともしゆ  
 いとツケルニ事モこころニテ所成式の中を  
 一ツケルニ事モこころニテ所成式の中を  
 一ツケルニ事モこころニテ所成式の中を

神名上

宮中 宣十五歳内  
東海

卷第九の首ヨリ神名下東山北陸山陸山那河以西海一ありか  
て神名と云下トの事

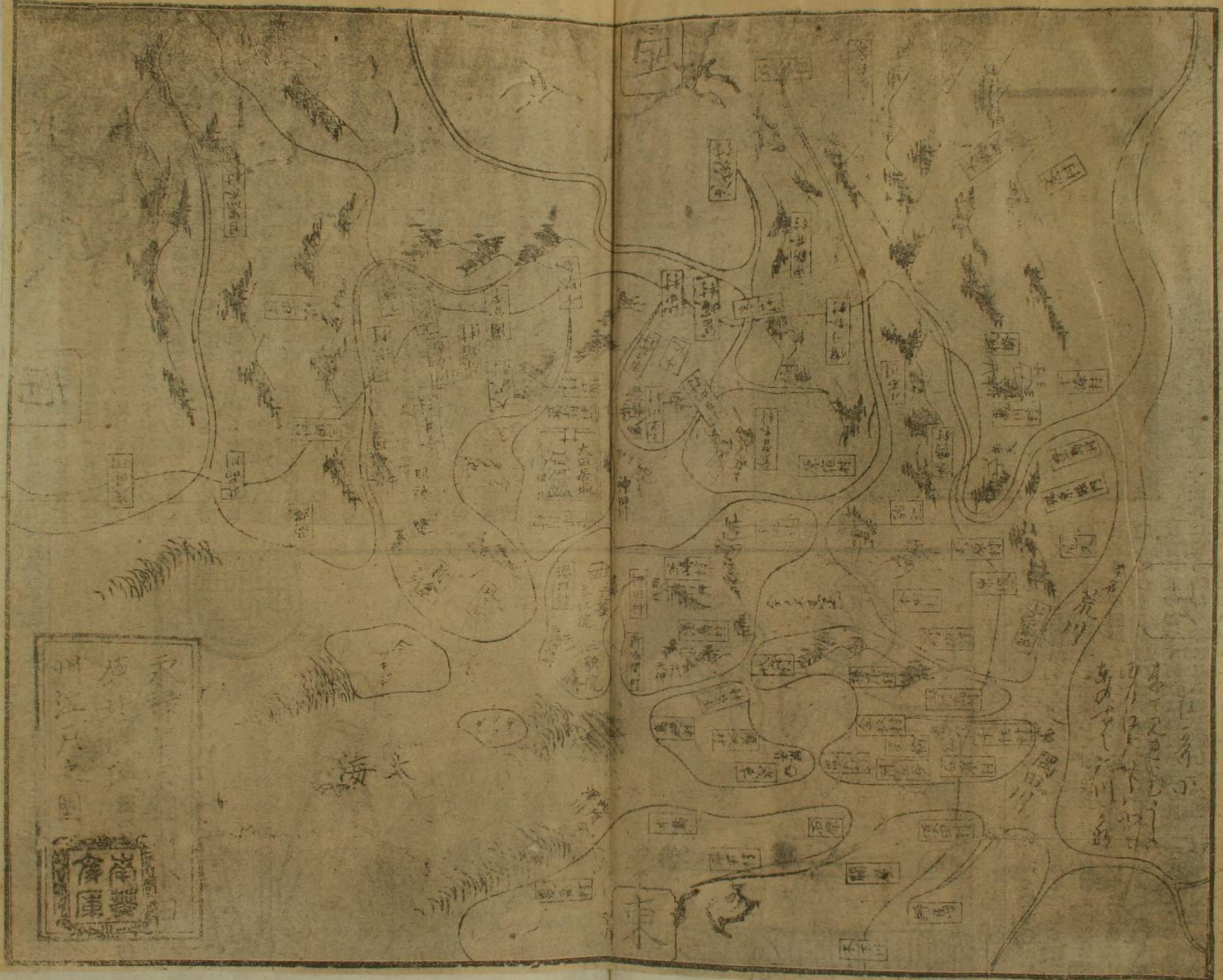
南英文之  
孫古圖

長 祿 年 間



長祿二戊寅年二月江戶  
谷文晁

永 祿 年 間



永祿  
前橋  
荒川



大  
海

東

荒川  
前橋  
東

人之道<sup>ニ</sup>遠<sup>ク</sup>也<sup>ニ</sup>。老<sup>シ</sup>カ<sup>ラ</sup>カ<sup>ク</sup>。若<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ク</sup>。

是<sup>レ</sup>家<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>也<sup>ニ</sup>。夫<sup>レ</sup>者<sup>ハ</sup>。人<sup>ノ</sup>ノ<sup>レ</sup>也<sup>ニ</sup>。

玄<sup>ノ</sup>法<sup>ノ</sup>也<sup>ニ</sup>。若<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ク</sup>。若<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ク</sup>。

若<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ク</sup>。若<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ク</sup>。若<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ク</sup>。

若<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ク</sup>。若<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ク</sup>。若<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ク</sup>。

若<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ク</sup>。若<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ク</sup>。若<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ク</sup>。

若<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ク</sup>。若<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ク</sup>。若<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ク</sup>。

若<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ク</sup>。若<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ク</sup>。若<sup>シ</sup>キ<sup>ト</sup>カ<sup>ク</sup>。

一也。如我平家。出。

中家。向於其方。

節。亦於今為古。

好古。亦於今操之。

既守其舊。亦時改之。

七操。亦為不措。

竟。通一部。如遊。

其如。漢馬。在諸。

字。一云。山井。生有。



系固不<sup>モ</sup><sub>レ</sub><sup>ミ</sup><sub>レ</sub>平<sup>ヲ</sup>也<sup>ハ</sup>  
所<sup>レ</sup><sub>レ</sub>不<sup>レ</sup>回<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>  
お<sup>レ</sup>保<sup>ル</sup>為<sup>ス</sup>知<sup>ル</sup>為<sup>ス</sup>  
為<sup>ス</sup>又<sup>ハ</sup>冒<sup>ス</sup>難<sup>シ</sup>者<sup>ハ</sup>  
之<sup>レ</sup>為<sup>ス</sup>接<sup>ス</sup>直<sup>ニ</sup>而<sup>シ</sup>也<sup>ハ</sup>  
以<sup>テ</sup>之<sup>レ</sup>為<sup>ス</sup>也<sup>ハ</sup>

肥前國忠吉

肥前國忠吉  
同治五年  
應山根岡信  
本

嘉永五年  
同治五年  
應山根岡信  
本

越後守包真

以地鐵研作次

藤原國吉造



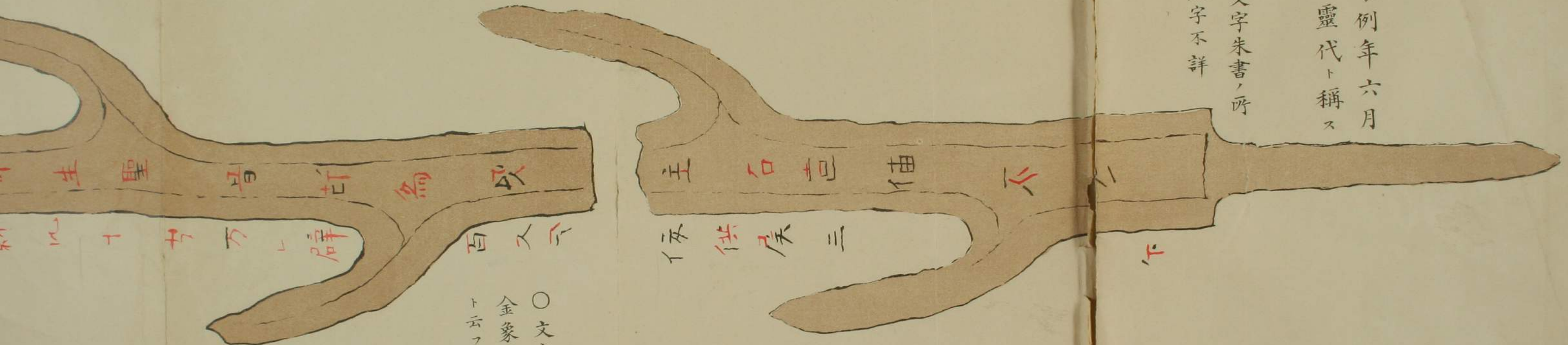


石上神社神寶圖

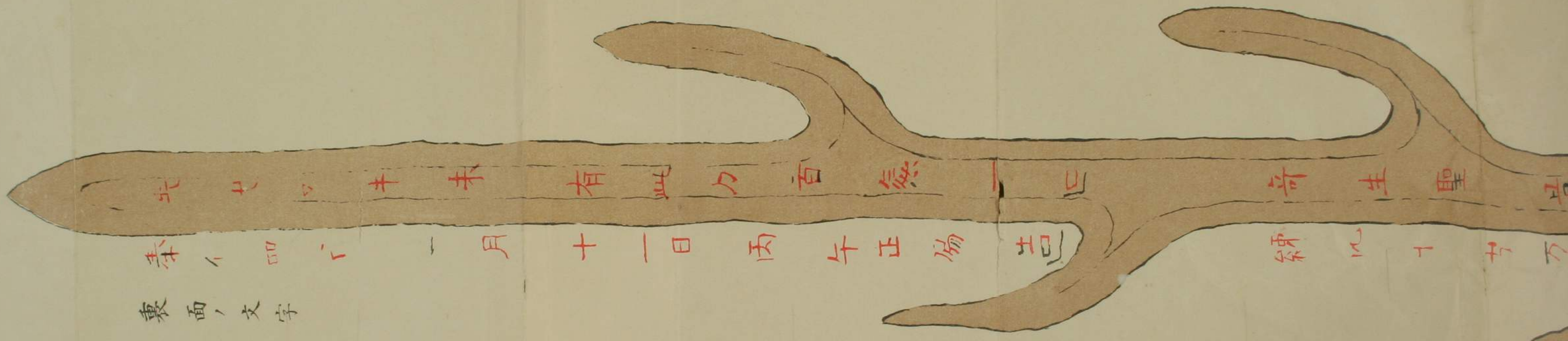
寸法如圖

古來六义ノ銚ト稱シ例年六月  
神田祭渡御ノ節靈代ト稱ス  
傳來不詳

地鐵 筋并ニ文字朱書ノ所  
金象眼アリ文字不詳



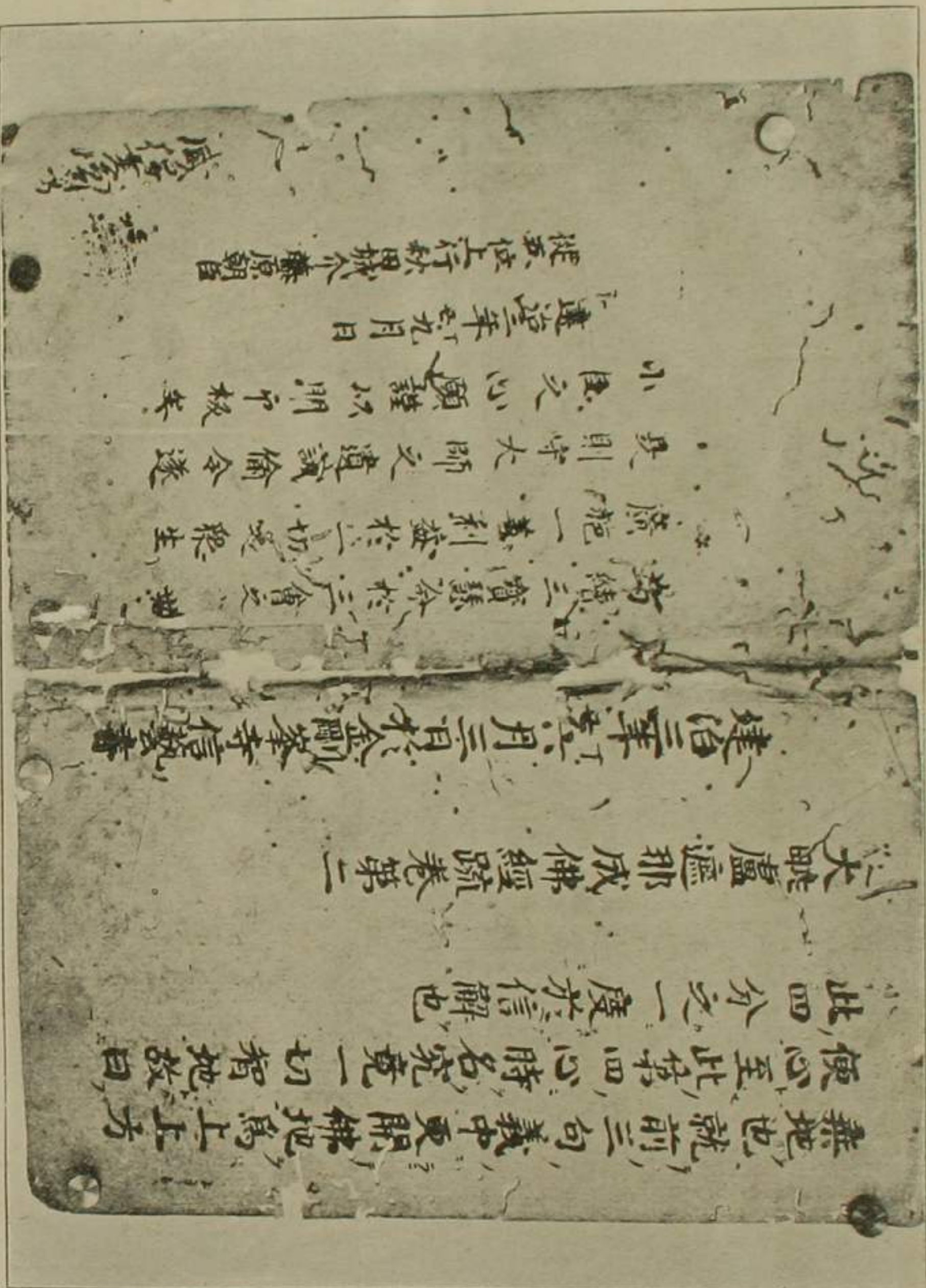
○文字及筋ノ黒キモノハ  
金象眼ノ剥落セシ痕ナリ  
ト云フ



光 也 心 半 未 有 此 乃 音 無 一 正 奇 生 聖 壽  
奉 八 四 十 一 月 十 一 日 丙 午 正 偏 出 續 凡 十 七 万

裏面文字





無地也就前三句義中更開佛地爲上上方  
便心至此第四句時名究竟一切智地故曰  
此四分之一度亦信解也

大毗盧遮那成佛經疏卷第二

建治三年六月三日於金剛峯寺信敬書

考續三寶集於三會之期  
廣施一善利益於一切衆生

身則守大師之遺教偷令遂  
小臣之心願謹以明字板矣

建治三年九月日

提婆達上行於思城今藤原朝臣

### 高野板大日經廿帖

赤堀又次郎

奈良地方に於て早く發達せる經論印刻の業は、鎌倉時代に既に京都奈良地方にも漸々に行はれたりと見ゆれと、其遺本の今に存するもの甚稀なり、この寫眞は、田中教忠翁所藏の高野板大日經を、早稻田大學圖書館に於て寫されたるものなり、卷末に筆者信藝の名を題す、信藝の事蹟未詳ならずこの地に、なほ建治三年板行の請來目錄一卷、弘安三年板供養次第法疏、同年板悉曇字地等あり、摺字の經即ち印刻の古經論に、筆者の名あるは珍とすべし、願主の藤原朝臣とあるは、安達泰盛なり、泰盛は盛長の曾孫、父義景に繼ぎて秋田城介となり、評定衆に補せられ、且北條氏の親戚たるを以て、鎌倉幕府に勞

力あり、かゝる願主の名あるも又珍らしといふべし、泰盛の祖父景盛實治二年高野山にて死す、建治三年は其二十三回忌に當る、或は其追福の爲に開板せるか、又案ずるに建治三年より八年後弘安八年十一月十七日泰盛の一族、皆北條氏に滅せらる、疾く何か政治上に計畫せるところありけんを、「小臣之心願」といへるにや、更に考ふべきなり、

泰盛の刊行せるもの、此他に信藝筆の供養次第法疏二帖同筆、悉曇字紀一帖、能海筆の蘇悉地經三帖等あり、よくよく深き心願ありしものによ、

高野板の古きものは、この他に建長六年快賢板の秘藏室鑰三帖、同じき十住心論十帖、建長八年の釋論十帖、正嘉二年の性靈集七帖等も、稀に存す、泰盛の板の後にもなほ數多の開板もありて、高野山には板木の藏にありしに永正に焼亡せり、

そは「高野山焼失記」に、永正十八年二月十二日西院より失火のことを記せる中に、

「摸經藏經三倍經、大疏、釋論、再三師尺(本のまゝ)儀帆悉曇章等論、其他昨分板木悉燒了」と見えたることに、皆焼失せるなり、

故に、田中翁所藏の本等は希有にして今に存せるも

のせんハ物：改板するにせざる也  
是書もあつた感得竟然とあつたは  
へうやん前所あるのりあるるるる



彙 報

◎越後國彌彥神社所用火杵

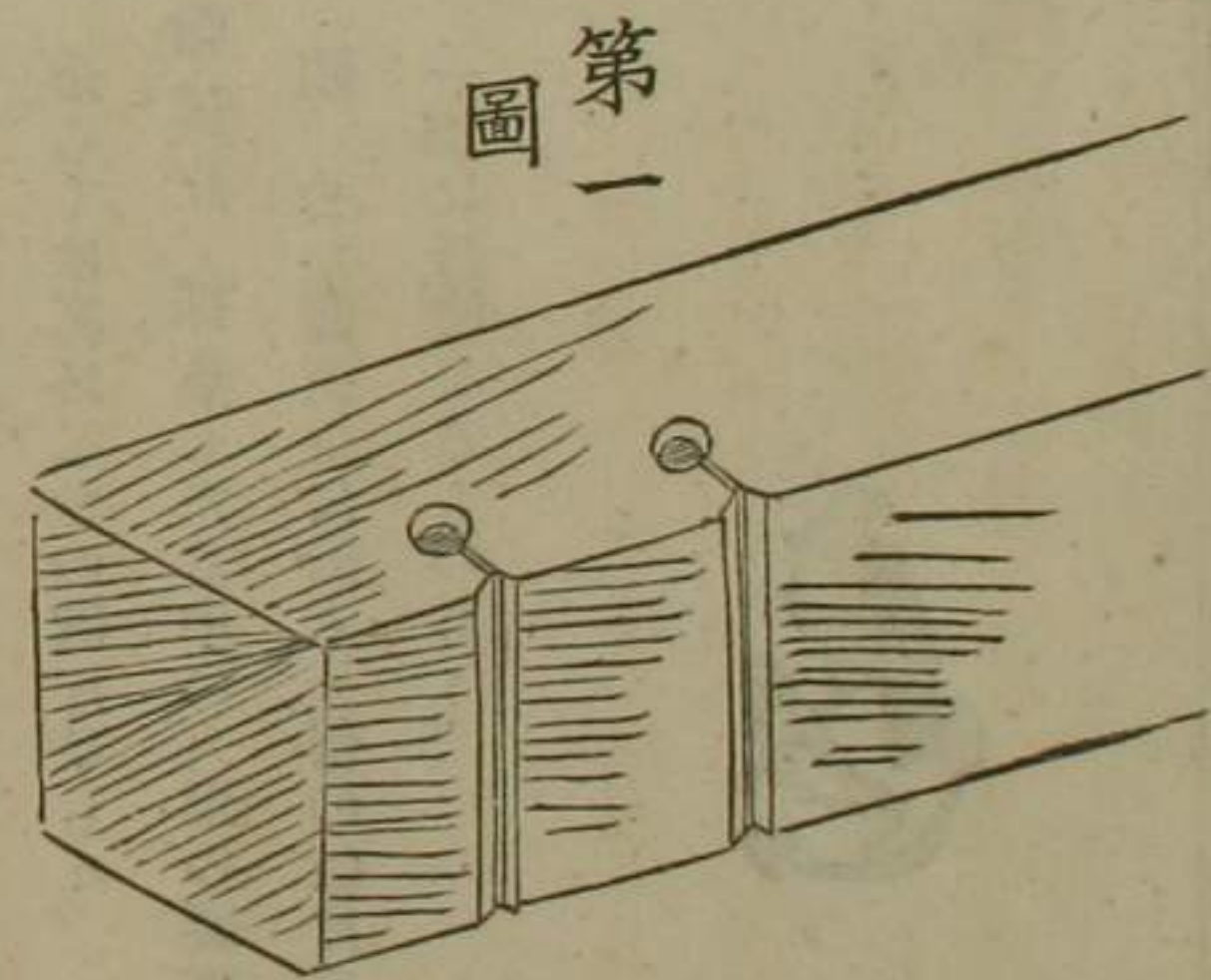
越後國幣中社彌彥神社には現今既に廢絶したれども明治五六年頃迄は火杵にて發火する方法傳存せり、其の形狀は出雲大社に行はるる者とは相違し、鳥居龍造氏が東京人類學會雜誌第百廿六號第四圖に記載せられたる者に似たれども又同じからず、其の形狀大略左の如し。

第一圖は所謂火臼なり、原料は長さ二尺二三寸、太さ二寸の三寸角位の檜の木より成る、圖の如く所所に三角形に木肉を削り取り三角形の尖端に二三寸位の鋸目を付け、鋸目に密接して圓き穴あるは火杵を挿入するの用に供せんとてなり。

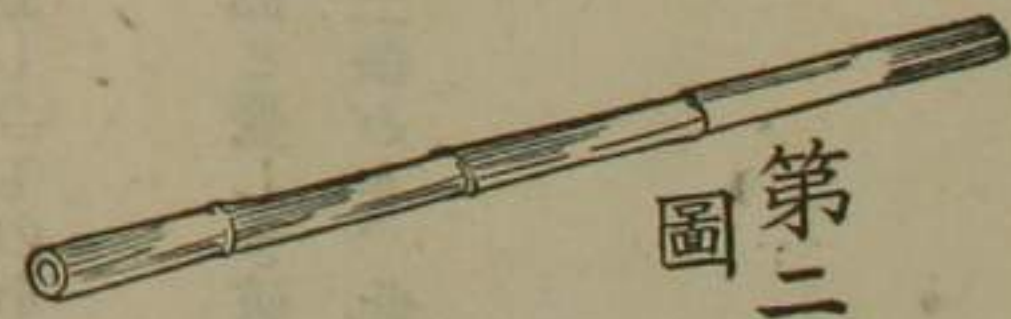
第二圖は火杵にて通常弓の矢を用ふ、彌彥神社にては未支那地方に行はるる發火法の如く木杵を用ひたることなし。

第三圖は發火の次第を模寫せしものなり、圖の如く兩人にて火杵を火臼に挿入し強く摩擦すれば自然に木屑出でて發火するなり。(花井菊太郎氏報)

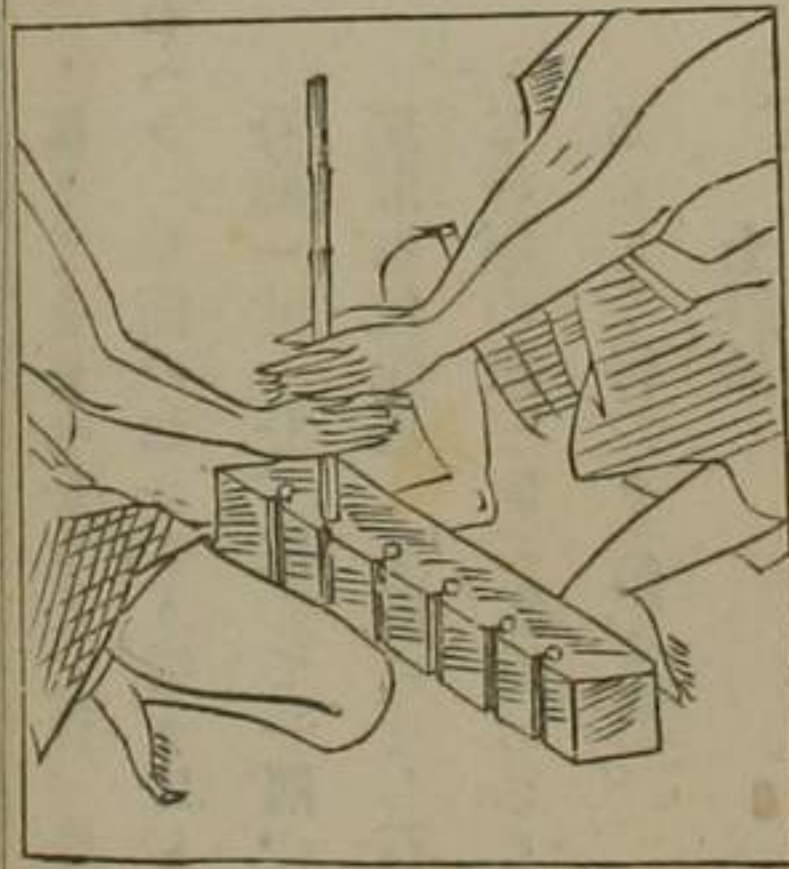
若林勝邦曰く伊勢忌火屋殿の火臼も同様の切目を施して木製の火杵を用ふ、出雲大社の火杵も木製なり、支那發火法に全じ、但し一人にて爲し得るなり、筑後國生葉郡山北村加茂神社の火杵も木製にして是れは二人にて爲す、詳細は東洋學藝雜誌第八十七號に記述したれば一讀ありたし。



第一圖



第二圖



第三圖

◎筑前國の筑紫鉾の鑄型(寫眞版説明)

若 林 勝 邦

筑前國の各處より發見されし筑紫鉾の鑄型のことは既に青柳種麿の筑前續風土記に見ゆ本誌寫眞石版圖として挿入せる袋杷の方は續風土記に掲げたるもの、一なり青柳種麿の記する所左の如し

那珂郡井尻村の東南藤崎人家の後を大塚と云いかなる人を葬しか詳かならず又寛政の末熊野權現の後の廣藪を開き溝を掘たりしか百姓惣吉と云者塚の際より鉾の鎔絶を掘出せり石型長三尺計上下合せてあり石質温石の如し須玖村にあり鎔絶の類なり其側より炭屑多く出たり然れば古此所にて銅鉾を鑄たりしなるべし由來詳かならず此邊土中より古瓦多く出る昔大寺など有し跡なるべきか

又同書に

那珂郡須玖村熊野權現社岡本にあり岡本新村等の産神なり岡本近邊にばんじやくちんと云地より天明の頃百姓幸作と云者畑を穿ちしが銅矛一本掘出せり長二尺餘其側に皇后峯と云山にて寛政の頃百姓和作と云者矛を鑄る型の石を掘出せり矛は熊野社に藏し置しか近年盗人取て失せたり此皇后峯は神功皇后の古跡の由村老云ひ傳ふれども詳かなること知者なし

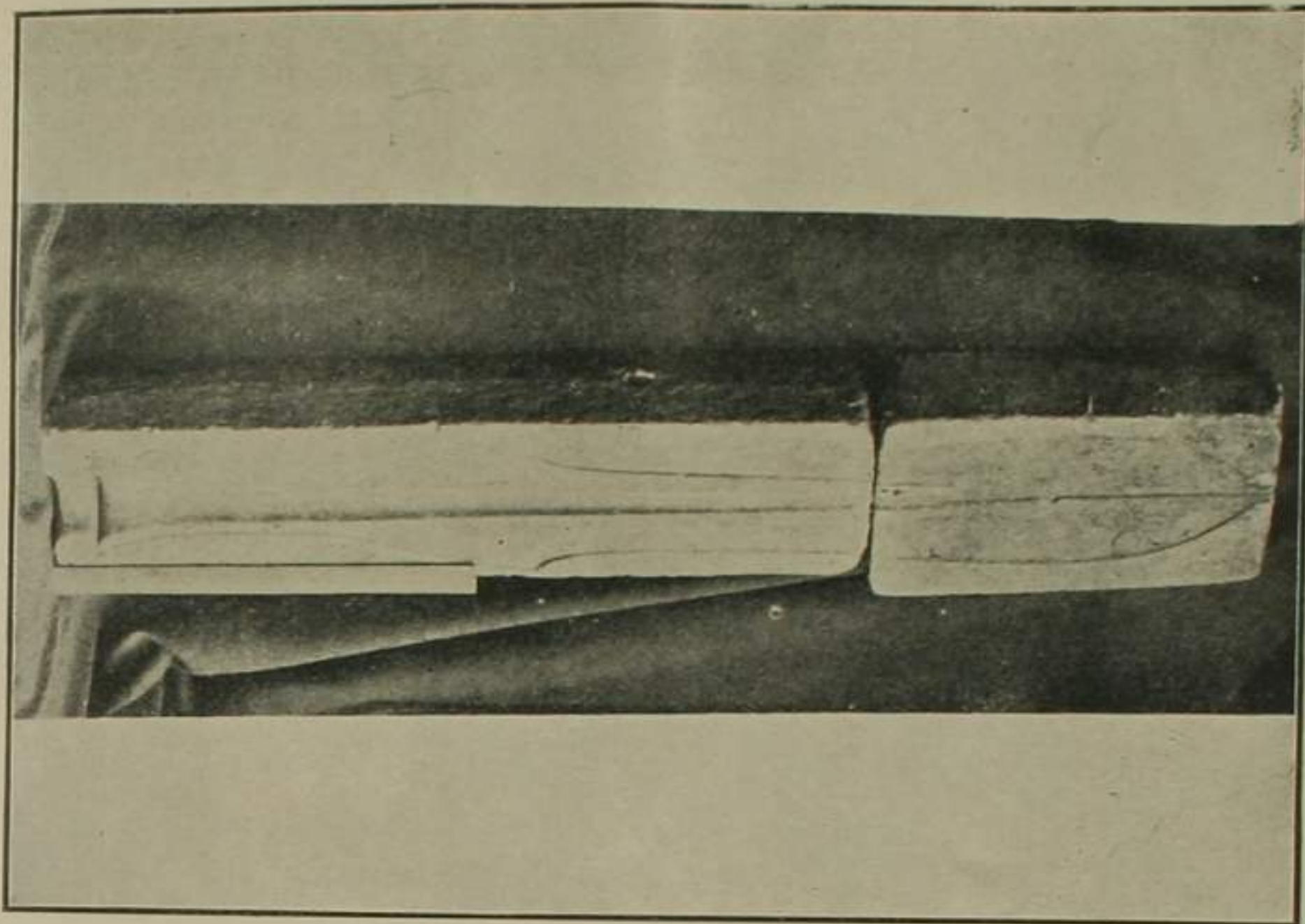
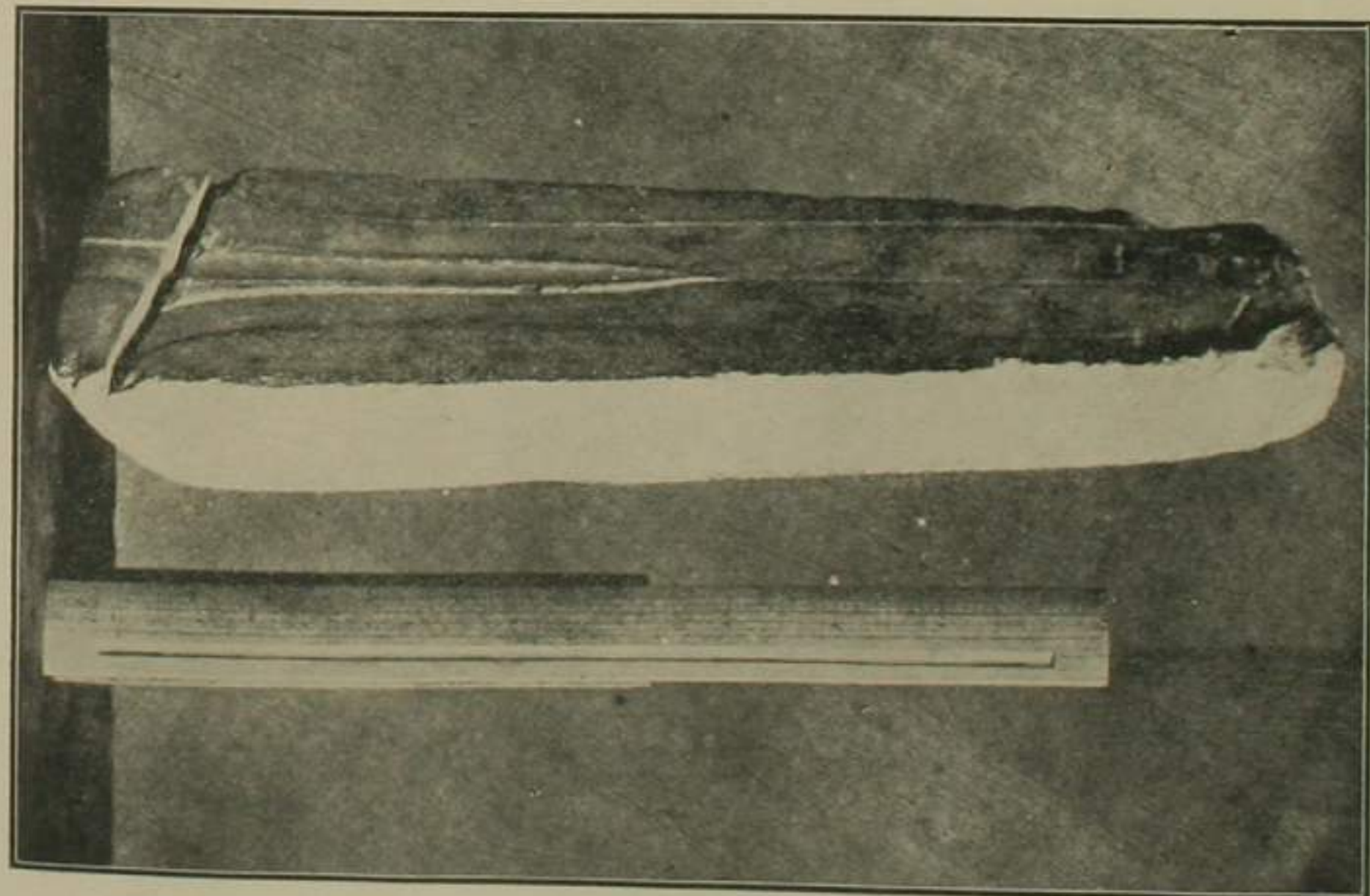


圖 型 鑄 鉾 (上見を認解の氏林吉)



鉾

かなる時に斯るもの、爰に埋れしか

右鉾の報告は始めて世に公になりしは人類學會雜誌第廿四號に江藤正澄氏の記されしことなり同雜誌上鉾の鑄型の圖は木板にて縮寫したれば現品を見るに及んで遺憾の点なきにあらず予が嘗て同地に至り寫眞師をして撮影せしめし寫眞を今回石版圖として本會雜誌に挿入するの榮を得たり聊か全形を知るに足らん側面の小孔深さ二分五厘型を合する時に便す全長幅等は側にあ

る尺にて明かならん

次に短莖杷の分は東京帝國大學の命にて余の九州巡回の際得たるもの此圖も東京人類學會雜誌にあり然れども木板にして榻木によりしもの故に平面にのみ全形を見るに由なし大さ等は傍に副へある尺によりて明ならん是又寫眞石版として本誌に掲ぐる所以なり同品は筑前國遠賀郡吉木村より發見せり村人の砥石として使用しおりしもの故に表面磨滅せり

以上の二品は本邦九州に於て筑紫鉾の製造を確証するに毎に引用さるゝ好材料なり此他余は九州人が或る事情により妨げられ見るを得ざる福岡近傍上高宮村の鉾の鑄型五個を見るを得たれば次號に記して始めて世に公にすべし

彙報

◎宇治鳳凰堂屋上の銅鳳 本號の卷首に挿入したる寫眞銅版は、宇治平等院鳳凰堂の屋棟上なる鳳形圖なり。鳳凰堂は藤原時代の建築の標範として著名なれば、ここにその詳細を述ぶるの要なし。但その構造につき一言せんに、該佛堂は、他に比類なき形體にして、先づ中央に樓あり、閣道左右に張て矩形となり、その矩の隅に寶形の樓あり、閣道よりは少く高く、中殿よりは大に低し、中殿の後に廊あり、長く方丈の扉に達す、即ち中殿は鳳の體なり、閣道は左右の翼なり、背後の樓は其の尾に象どれり、堂の高厚恰も適合して、寸分加減することを得ずと。かく建物の全體が鳳形に象どられたる上に、屋棟上の兩端近くに各々銅製の鳳形ありて、風に從て廻舞す。本圖に示したるもの即ちその一なり。この鳳形は、全高三尺二寸六分許あり、その



(よ見を説解の内欄報彙號本)

體部は青銅の鑄物にして、兩翼と尾部とは、銅板の打物より成り、所々銚を以て綴合せり。もとは金銅なりしと見えて、今も黄金の色微かに残れる所あり。脚下の方形の臺は、下なる圓柱と接著し、その圓柱は屋棟中に入りて、下部の如何は見ること能はず。鳳形全體の姿勢能く整ひ、雄健にして、高雅の趣致を失はず、實に有益なる參考資料たり。因みにいふ、本圖の原圖は會員工學士關野貞氏が親ら撮影せられたるものにして、特に複寫して本誌に掲ぐることを承諾せられたり。こゝに記して、同氏の厚意を深謝す。(記者)



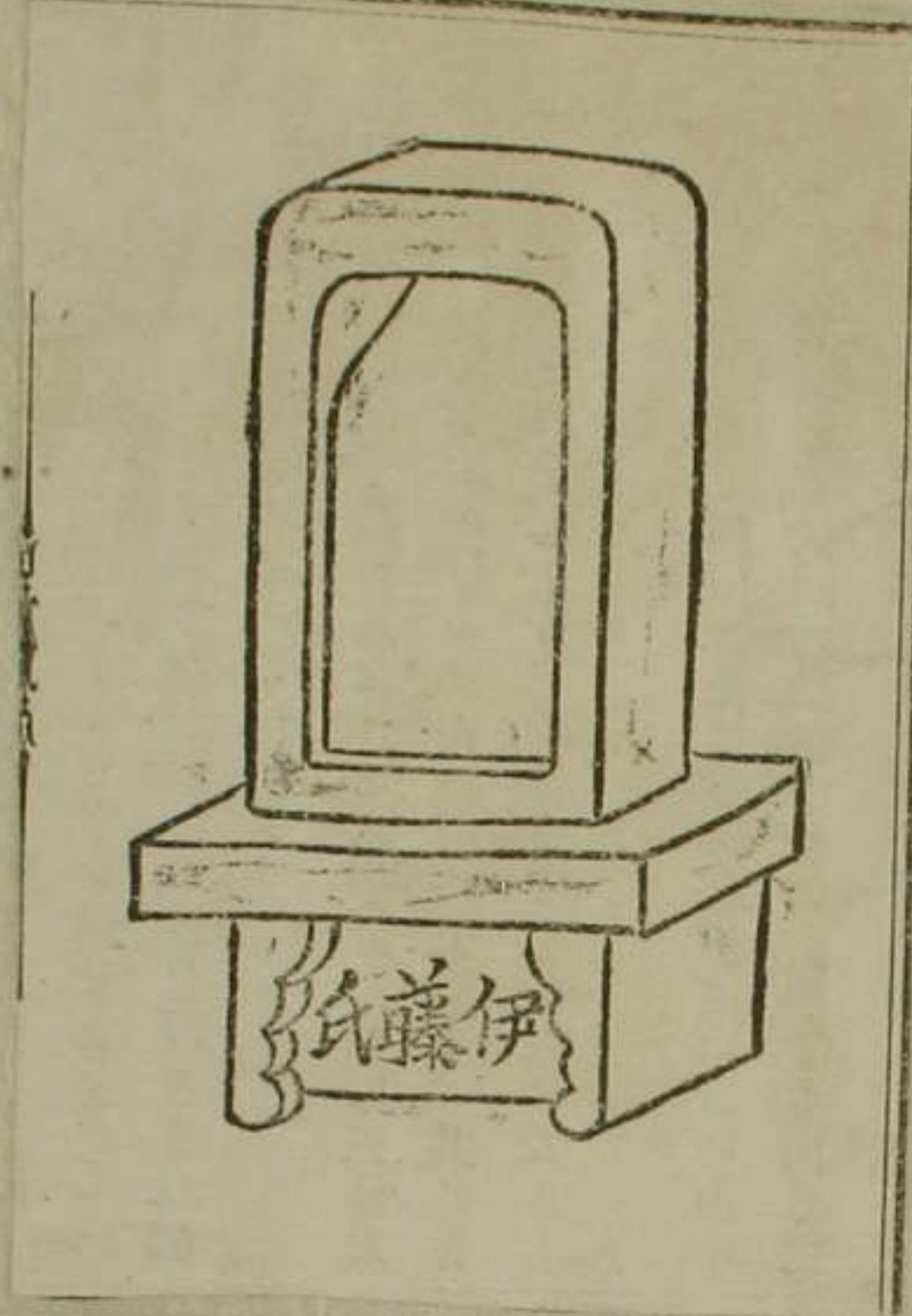
茲に圖する所の盤上立棋の墓は谷中口禪宗龍興山臨江寺の丘山に存在するもの、一見好棋家たることを知り得しも寺僧に就て質せしに、本郷森川邊居住の筆工にして伊勢屋孫兵衛なる者の墳墓にて、此者將棋を唯一の娛樂となしたりしかば、其遺言に任せ歿後圖形の如き墓石を建設せりといへり、駒の正面には「夏屋子樹信士」右側に「文化十癸酉年六月廿一日」と刻せり、曩に友人石川莊氏和田の某の棋形墳墓を搜りて本誌に寄せらる、然るに余亦此墓を發見す併せ掲げたらむには以て好敵手と爲すに足らむか。

◎机上立硯之墓圖

石川文莊

淺草新谷町萬隆寺に。机上立硯の墓あり。表面にうれ我れは。空より來りて。また空に歸る。此世は客なればいと申す。

(朝顔や露の命の)以下二三字あるも文字不明)等の文字を刻し。裏面には享和二年壬戌正月上六日。圓覽大鏡信士とあり。臺石には伊藤氏と刻せり因て執事松岡某に過古帳の取調を乞ひたるに。伊藤長左衛門のみあり誰の先祖に相成るや不分明の由し。蓋し生前書を嗜みし人なる可し。其の墓圖は左の如し。



東寺山水屏風画二部



福地復一手寫

東寺山水屏風画一部



福地復一手寫

(考古學會雜誌第五號附圖)

く且つ位地の宜しからざる如きは概ね前者に屬す可しと考ふ、

◎東寺山水屏風畫中の帳臺

福地復一

東寺の山水屏風の寺傳に弘法大師唐より持ち歸りしもの、一と稱し古來同寺の寶什の中に數へらるゝものなり。山水屏風の眞言宗にて灌頂を行ふ時用ゐる道具の一にして、我國にては宗派に由りて高雄山室生山又は高野山等の靈山の景致を書ける者多し。此東寺古傳の山水屏風は大師の將來とせば即唐土の山水ならざる可らず。然るに其畫様を見るに筆蹟全く我國土佐派の趣ありて山水樹木

さて其圖中隱士様の一人小廬に居る者あり、原本剝落して明に見難しと雖、精く探るときは此廬中に華麗なる帳臺を掘えたり。其製今清涼殿の御調度たる御帳臺に類し、濱床の上に三つ組の柱を立て四方に帷を垂れ、帷の上には帽額を懸けたり、又臺の床には錦の褥を敷けり。

帷なる菱形の文は大和藥師寺の神功皇后仲比賣の木像の彩色模様を類し、帽額の靈芝雲と鳥とは仁和寺の寛平帝御遺愛品の寶珠品の蒔繪に似、褥の模様は四天王寺扇面寫經の下畫に其形式あり。

古き帳臺の圖様は類聚雜要抄にも載せられ又春日權現験記などにも見えたれども、此等は皆鎌倉時代の物にて延喜に近き頃の古様は全く此山水屏風の中より探り出ださ

○東寺山水屏風畫中の帳臺

○本邦各地ヨリ掘出ス古瓦ニ就テ

帳臺の如きも全く唐制にして、即西洋の寢臺も同一制なるが如し。今略圖を掲げて博識家の詳説を待つ。

歴史上ノ技術品トシテ愛玩セルハ甚少ナウゴザリマス、元來本邦ニテ瓦ヲ用キラレシハ今更申迄モアリマセン

く且つ位地の宜しからざる如きは概ね前者に屬す可しと考ふ、

◎東寺山水屏風畫中の帳臺

福地復一

東寺の山水屏風の寺傳に弘法大師唐より持ち歸りしもの、一と稱し古來同寺の寶什の中に數へらるゝものなり。山水屏風の眞言宗にて灌頂を行ふ時用ゐる道具の一にして、我國にては宗派に由りて高雄山室生山又は高野山等の靈山の景致を書ける者多し。此東寺古傳の山水屏風は大師の將來とせば即唐土の山水ならざる可らず。然るに其畫様を見るに筆蹟全く我國土佐派の趣ありて山水樹木の如きも皆日本風なり。畫中の人物に於けるも其服裝は稍唐風に類するものあれども、よく其文様をたゞし作りざらざるを見る時は全く我國の風にして、即藤原時代の初頃專唐制に倣ひし頃の様に近し。されば此屏風は或は大師の持來りし圖に由りて凡九百年前の昔摸寫したる者にはあらざるか。

○東寺山水屏風畫中の帳臺

さて其圖中隱士様の一人小廬に居る者あり、原本剝落して明に見難しと雖、精く探るときは此廬中に華麗なる帳臺を掘るたり。其製今清凉殿の御調度たる御帳臺に類し、濱床の上に三つ組の柱を立て四方に帷を垂れ、帷の上には帽額を懸けたり、又臺の床には錦の褥を敷けり。

帷なる菱形の文は大和樂師寺の神功皇后仲比賣の木像の彩色摸様に類し、帽額の靈芝雲と鳥とは仁和寺の寛平帝御遺愛品の寶珠品の蒔繪に似、褥の摸様は四天王寺扇面寫經の下畫に其形式あり。

古き帳臺の圖様は類聚雜要抄にも載せられ又春日權現驗記などにも見えたれども、此等は皆鎌倉時代の物にて延喜に近き頃の古様は全く此山水屏風の中より探り出だされたり。帳臺は多く寢殿の母屋に据うる寢所にて、後世は建築物の一部として室内に取り附けられ引戸を設けて出入する様になりたれども、其もとは別に室内に置き置るものにて、此山水屏風の圖に由りて其形式のいと古きことを知るべし。すべて藤原時代の初に當りては宮室の制諸調度服飾類の形式は唐土の物を摸したるか多く此



○東寺山水屏風畫中の帳臺

○本邦各地ヨリ堀出ス古瓦ニ就テ

帳臺の如きも全く唐制にして、即西洋の寝臺も同一制なるが如し。今略圖を掲げて博識家の詳説を待つ。

因にいふ東寺には此山水屏風の摸本とも覺ぼしきもの猶一二扇あり、何れも鎌倉以後の摸寫なるが如し。こゝに出せる圖は先年余が京都平安神宮の御調度を圖案せしとき其材料となさんか爲東寺の原本に就きて手寫せしものなり。猶此東寺山水屏風の全体の圖樣には聊思考もあれどとは他日の説に譲る。

◎本邦各地ヨリ堀出ス古瓦ニ就テ

在大坂 奥村 探古

私ハ好古ノ癖ガアリマシテ、數年前ヨリ少シノ餘暇アレハ遺跡ヲ探リ遺物ヲ拾集致シマスコトヲ第一ノ快樂トセリ、中ニモ古瓦ヲ採集シテ往時ノ技術ヲ研究致シマシガ、素ヨリ無學ノ野生テアリマス故、物書クコトハ至テ不心得テゴザリマスケレドモ、各時代ニ於ケル古瓦ノ摸樣ノ沿革ヲ少々申シ述べヤウト思ヒマス

古昔ヨリ好事家ノ古瓦ヲ愛玩シノコトアリマスガ、

歴史上ノ技術品トシテ愛玩セルハ甚少ナウゴザリマス、元來本邦ニテ瓦ヲ用キラレシハ今更申迄モアリマセンガ、欽明天皇御宇百濟國ヨリ傳來致シマシテ、其後推古天皇御宇ニ厩戸皇子ガ各地ニ佛刹ヲ創建セラレマシタ頃ヨリ多ク用キラレ、以後今日ニ及ホシマシタノデアリマス、其當時創建ノ諸佛刹即法隆寺、橘寺、大官大寺、百濟寺、四天王寺、神宮國祈寺等ノ境地廢趾ヨリ堀出マス古瓦ヲ見マス、瓦面ノ模様ハ八瓣ノ蓮花形デアリマシテ、平瓦ノ裏表共ニ一面ニ籠目繩紋布目等ノ模様ガアリテ中々ニ古色蒼然タル遺物デアリマス、中ニモ百濟寺、四天王寺ノ境地ヨリ明治十八年ニ堀出マシタ古瓦ニハ重圈形ノ模様ヲ彫リタル物モアリマシタ、其以後滋賀寧樂兩朝時代ニ創建セラレシ東大寺、興福寺、藥師寺、唐招提寺、崇福寺等ニ用ヒラレシ瓦モ殆ト推古朝時代ノ物ト同ジ様ニ蓮花模様デ籠目布目等モアリマス、野生ハ右等ノ古瓦ヲ一見シ、且藤貞幹大人ノ著述セラレシ好古日録ノ文ニ至古ノ屋瓦文字ナシ六七百年ノ物文字マ、アリ云々トアルヲ對照致シマス、從來好古家ノ隨ニ愛シ

